
例外の例外たる所以

睡魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

例外の例外たる所以

【Nコード】

N2308Q

【作者名】

睡魔

【あらすじ】

本来はそこにあるはずのないものがあつたとしたらどうなるのだろう？これはそんな物語。『特異点』と呼ばれた少年たちの存在理由とは……？ シリアスっぽいですけど、全く違います。原作に沿って進むifの物語。キャラ崩壊が多いです。というか、基本キャラ崩壊です。

第0話 プロローグ（前書き）

はいどうも。

懲りもせずに3作目です。

すべて同時進行ですが、すべて趣味ですので、すべて更新が不定期になると思われます。

ご了承下さい。

第0話 プロローグ

はじまりとはいつも唐突に訪れる。

そして、この世のすべてに例外はある。

例えば三毛猫。99%が雌だという。だとしたならば、残り1%の雄は例外と言えるのではないだろうか。

話は変わるが、並行世界というものを聞いたことがあるだろうか。

私たちが今、生活している世界と同じ時間軸上に存在し、別の次元で動いているという世界。この並行世界が1つではない、というのはこの話題に興味ある者なら聞いたことがある話だろう。

世界とは物語だ。詳しい数は分からないが、数ある並行世界の中で、たった1つだけその中に加わるはずのなかったものが加わり、別の物語を紡いでいるのだとしたら、その物語は例外と言えよう。

はじまりとはいつも唐突に訪れる。

これはそんな“例外”を作り出す要因となった少年たちの物語である。

第0話 プロローグ（後書き）

結構まじめに書いてみました。

いつも軽くふざけてるものを書いているのですが、すらすら書けました。

こういう感じで行こうかなと思いましたが、おふざけがないと生きられない体質なので、このような書き方は今回限りだと思います。

第1話 最初からピンチの理由（前書き）

予告通り、連投です。

第1話 最初からピンチの理由

今、俺の目の前には愛しの妹である神楽坂明日菜かぐらざか あすながいる。いつものかわいい顔が怒りに歪んでいる。

突然だが俺は今ひっじょーに悩まされる立場に置かれている。

だがしかし、この状況を説明するなら少し時間を遡らなければならぬ。

俺こと、神楽坂玲かぐらざか れいは魔帆良学園まほら中等部に通う中学2年生だ。

俺の紹介は後にして、今は冬休み明け。この度この魔帆良学園に新しい先生が来るらしく、その新しい先生が来る学校の教師であり、俺と俺の妹の保護者をやってくれている高畑・T・タカミチ先生（俺はタカミチと呼んでいるが）にその準備を手伝って欲しい、と言われボランティア活動に精を出している。

魔帆良学園は、中等部の中でも、男子校・女子校と分かれている。俺はもちろん男子校の方。そして今回新しい先生が来るのが俺の妹も通っている女子校の方。全く持って手伝う義理は無いのだが、タカミチにはいろいろと世話になってるし、そして何よりわが愛しの姫に会いに行けるので、快く承諾した。それに、女子校に行けるというのも大きなメリットだ。

男子校という性質上、女子と会う機会が減多にない。これは血氣盛んな男子中学生にとっては死活問題だ。そのため時々、女子校エリアに侵入して女子を心いくまで堪能する、というのが恒例になっている。そして毎回タカミチに捕まり、お説教。これがパターンである。

とまあ、こんな感じで毎回懲りもせずやっている。最近では防御が固くなり、近づくことさえも難しい。

しかし！ 今回はその楽園に入れるのだ！ しかも先生の許可ありで。これ以上いい機会はない。というか断る理由が見つからない。

楽園の事を思い描きながら俺はその日の授業を寝て過ごした。

放課後になり楽園へ飛び立つ直前、さすがに黙っていくのは悪いかと思い、この旨を学園長の孫で、俺と同じく妹がいて、親友とも呼べる存在の近衛俊司このえしゅんじに伝えてから教室を出た。この判断が後に間違っていたと分かるんだが。ちらっと俊司の方を見るとうつむいてプルプル震えているが、気にしないでいいだろう。

おれはそのまま下駄箱に行き、靴を履き替える。さて出発だとおもったその時、

「そりゃ！」

「ぐはぁ！」

何者かの襲撃を受けて床に倒れた。

「つてえー……。…ったく、何なんだよ……」

俺が体勢を立て直し上を見上げると、そこにはついさっきまで親友だったはずの近衛俊司がいた。

…やばい。見るからにこれはやばい。何がやばいかって？　なんか、その…体にオーラを纏ってる。見てるこっちが引くくらいなの。あれだ。あれに似てる。えっと、あの…そう！　阿修羅。今、俺の目の前には元友人の阿修羅がいる。あれ？　でも阿修羅って腕2本じゃ無かったような……。…

俺は再度阿修羅（仮）を見上げる。なんだってこいつはこんなことに……。まさか、怒っているのか…？　…こいつの心の琴線に触れるようなことはしてないと思うんだが……。…多分。

すると急に阿修羅（仮）が俺の制服の胸倉を掴んできた。そして一言、

「オマエ……。…クロス」

「なんで!？」

意味が分からなかった。なんで俺はもと友人の阿修羅（仮）に殺されなければならないんだ？

理解ができないものの、本能的に生命の危機を感じて阿修羅（仮）の手を振りほどき、一目散に逃げる。しかし、後ろからは阿修羅（仮）が追ってくる。…もうめんどくさいから（仮）付けなくていいか。

「オマエ、ニゲラレナイ」

“ブンッ!”

そんな声が聞こえたと思った瞬間、俺の顔の真横を何かが通り過ぎた。俺の前方に落ちて止まったそれは、よく見ると石だった。

ふう、なんだ石か………石!?

なんでこんなものが後ろから飛んできたんだろう。俺は恐怖で身を震わせながらも、人間の知的好奇心には勝てず後ろを振り向く。するとまさに今、道端の石を蹴り飛ばそうとしている元友人がいた。そういえばあいつサッカー部だったな……。

俺は即座に振り返り、全力ダッシュ!

後ろからはビュンビュン後ろから石が飛んでくるし、阿修羅が追ってくる。

「コロスコロスコロスコロス……」

「怖えよ!　　というか追ってくんない!」

別に追われるようなことはしてないんだが、追ってくるものがあると逃げてしまう。人間って不思議。

「フフ:オマエニゲラレナイ……。オマエコロス……」

「だから来るなって!」

その後、元友人を振り切りなんとかタカミチのいる学校へとたどり着くことができた。

という訳で、今は門の前にいる。

「はあ、はあ……。何だあいつ…化け物だろ……」

俺が疲労によりへばっていると、学校の中から1人の男が出てきた。なんかナイスミドルという言葉が似合いそうな外見をもつこの男こそタカミチである。

「やあ、玲君ごくろうさま。……なんか疲れてるね」

「まあな…。ちょっといろいろあったんだよ……」

俺は息を整えて顔を上げる。

「……で？　俺は何をすればいいんだ？」

「まあまあ。久しぶりに会ったんだから少し世間話でもしようじゃないか」

「遠慮しとくわ。それに久しぶりって言っても2週間だろ」

「そう言わずに。ここに来た先生が誰か聞いたかい？」

「いや、聞いてない。そんなことより早く終わらせて、アスナに会って、早く帰って寝たい」

「……はあ。君のシスコンっぷりには驚きだね」

その程度の事は言われ慣れてる。それに家族を大切にしないでどうするんだ。

「なんとでも言ってくれ。それで？ 何も無いならアスナにあってから帰るからな」

「まあ待ってくれ。その彼はたったの10歳で先生をやるうとしてるんだ」

「ふん…。まあ子供だって銃持って戦争するような時代だしありなんじゃねえの？ 労働基準法には引っかかるけどな。……まさか俺にサポートしろとか言わないよな……？」

「さすが、話が早いね」

「そんな事だろうと思った。その話については辞退させてもらうわ。俺にも学校があるし、無理だろ」

「本音は？」

「そんなかったるいこと引き受けられっか」

「ははっ、君らしいね」

そう言ってタカミチは乾いたような笑みを浮かべる。様になってるのがむかつく。ちなみにアスナはタカミチに淡い恋心を抱いているようだ。自分の保護者に恋をするのは些かどうかと思うが、それは本人たちの自由だ。ったく、こんな奴のどこがいいんだか。

「という訳でもう一度お願いするよ。ネギ・スプリングフィールドをサポートしてやってくれないか？」

「いやだね。お断りだ。……ってちょっと待て。今何て言った？」

「なにがだい？」

タカミチはとぼけたように言う。だか多分、こうなることを分かってたのだろう。彼の口元は楽しげに歪んでいる。

「名前だよ、名前」

「ああ、彼だよ、この学校の新任の先生の名前。ネギ君。ネギ・ス

プリングフィールド君だ」

「おい、スプリングフィールドって…」

「そう。彼は真正銘英雄、千の呪文の男ナギ・スプリングフィールドと、災厄の女王アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの子だ。魔法学校は主席合格らしいね」

俺は正直驚いた。まさかナギの子だとは……。それにしても主席合格か…。血はちゃんと受け継いでるってか。もしかして性格もあんな感じか？これは一波乱ありそうだな……。

「そのネギ君が何だってこんなところに？」

「修行の一環でね」

「ふーん……。じゃ、少し顔でも見てくるかな」

「引き受けてくれるのかい？」

「そうするように仕向けたのはタカミチだろ？」

「そう、じゃあ交渉成立だね。詳しいことは今度伝えるから」

「あいよ」

「そうそう、ネギ君は外のどこかにいると思うから」

「さんきゅー」

ネギ君を探すこと約10分。石段に座っているネギ君らしき人物を発見。杖も持ってるし間違いないかな？ 良く見てみるとナギの面影が無いことも無い。何か表情が浮かないな。…よし！ ここは生きる元氣製造マシン（自称）の俺が励ましてあげようじゃないか！
……自分のネーミングセンスの無さにちよつと驚いた。

近づいてみるとネギ君の視線がある一点に集中していることが分かった。その視線の先をみると階段の上から……人(?)が降りてきている。たくさん本を抱えてるな……本の化け物か？ 紳士としては助けられないわけにはいかないな。ちゃんと足もあるから人間みたいだし。あ、でもこの角度だと一段降りるごとにスカートの中が見えそうで見えな……ハッ！ いけないけない。俺は紳士なんだ。いろいろと勿体ないかもしれないけど今はあのふらふらしながら歩いているあの子を助けなければ！

…あ、こけた。

まずいまずいまずい！ そりゃあんなに大量の本を持ってたらかけるだろうと思ってたけど！ まさか階段じゃ無い方にこけるとは！ ここから走って間に合うか？ いや、迷ってる時間は無い！ 走れ、俺！

ふと横を見るとネギ君も気が付いたようだ。…ん？ 杖を取り出して何をする気だ？ そりゃあ杖を使ってやることは限られてるんだが…。まさか、こんな道のど真ん中で魔法を使う訳無いよな……？

俺は不安になりとっさに認識阻害の結界を張った。ネギ君はそれに気付いて驚いてるようだが気にしない。しかも案の定ネギ君は魔法を使って女の子を地面ぎりぎりのところで止めた。ふう、結界使ってよかった…。ネギ君のおかげでその子の体が宙に浮いているうちにダイビングキャッチ！ ……ではなく余裕で抱きかかえる。

「ふう……。君、大丈夫？ けがはない？」

俺（とネギ君）が助けた女の子は、最初は何が起こったのか分からなかったのか俺の腕の中で呆然としていたが、俺がお姫様だっこをしていることに気づくと顔を真っ赤にしてすぐ立ち上がった。

「あ、あのっ、ありがとうございます！」

「いやいやいいって。それにお礼ならネギ君に言った方が良いよ」
「えっ……」

俺がネギ君の方を振り返ると、ネギ君は驚いた様な顔をしたが、すぐに女の子の方を向き、

「えっと、出席番号28番の宮崎のどかさん……ですよね？ 大丈夫ですか？」

「えっ、あの、はい。大丈夫です。失礼します！」

女の子……宮崎のどかさんは走り去ってしまった。髪で隠れていたがなかなかの美少女だったな……よし、覚えておこう。

ネギ君は今度は俺の方を向く。

「ええっと……アスナさん……では無いですよね？ 声も違いますし、髪型も違います。それに何よりさっき結界を張りましたよね？ ……
……あなたは何者ですか？」

ネギ君が杖を構えて臨戦態勢で聞いてくる。これは逃げられねえな……。

「俺か？ 俺はアスナの兄の玲だ。そんなことよりも、だ！ 人を助けるためとはいえ、むやみやたらに魔法を使うんじゃないぞ。ばれたら元も子も無いからな」

「あ、はい、すみません……。それで玲さん。でもさっきの結界は……」

「あー、あれか？ あれは、その、何だ気にするな」

「はあ……」

こんなぶっちゃけた会話をしているのはさっき張った結界がまだ効いているからだ。もし、この一部始終を見ている者がいたとしても、魔法やら何やらについて認識することはできないだろう。そのぐらゐの結界の精度には自信がある。

だが、何事にも例外は付き物だ。

とある少女にだけ、この結界は意味を成さない。だけ、という言い方には語弊があるが、少なくとも今現在で魔法という他の人からしたらファンタジックな物に関係ない人物の中ではおそらく彼女だけだろう。

しかも、不運は重なる。

その彼女……神楽坂明日菜はその一連の出来事を最初から最後まで見てしまっていた。

俺的には、終わったなと思っている。

ゝのどか視点ゝ

先ほどあ走り去った少女は一人走っていた。

「(どうしよう……男の人に触っちゃった……。さっきの人……神楽坂

さんに似てたけど違った…。でも……いやじゃない…。この気持ち
は何だろう……。？」

少女は一人自分でもわからないような初めての気持ちを抱えていた。

第1話 最初からピンチの理由（後書き）

玲 「どうもー。神楽坂玲でーす」

俊司 「どうもー。近衛俊司でーす」

玲 「お前、今回まともにしゃべってなかったな」

俊司 「……ああ」

玲 「大丈夫だって。次回はちゃんと戻ってるから」

俊司 「……本当か？」

玲 「……たぶんな……」

俊司 「なあ、なんで目をそらすんだ？」

《今日の特異点》

1話目から玲がネギのフラグを奪いました。

第2話 ピンチ！ そして、墓穴を掘った俺（前書き）

珍しい、2日連続の投稿です

……いつまで続くのやら

第2話 ピンチ！ そして、墓穴を掘った俺

ここで冒頭に戻る。

俺とネギ君はアスナにあまり人のいないところまで引っ張られた。我ながら力が強い妹だ。

ここで付け足すが、俺とアスナはほぼうり2つ……らしい。自分の事は分らないが。ぱっと見て分かる違いは声と身長と髪型だけだ。声は俺の方が低いし、身長は俺の方が高い。髪型はアスナはツインテールにしているが、俺は伸ばしっぱなしだ。先ほどネギ君が俺の事をアスナか、と聞いたのはこれが原因だろう。

さて、話を戻そう。

さっきからずっとアスナはネギ君を問い詰めている。その怒涛の質問の奥州にネギ君はテンパって何も答えれていない。……傍から見るとすごくかわいそうだった。俺は兄の責任として暴走する妹を止めてあげることにした。今のアスナを止められるのは世界中で俺だけだろう、うん。

「まあまあアスナ、落ち着けって」

「お兄ちゃんは黙ってて！ 大体、なんでお兄ちゃんがここにいるの！？」

その疑問はもつともだ。違う学校に通っている身内、しかも兄が女子校の敷地内にいたら驚くだろう。事情を知らない人から見たらただの不審者だ。まあ俺の場合はアスナと似てるから疑われることは無いけど。

それにしても矛先がこっちに向いたか……。それはさすがにかんべんだ。という訳で話をそらす。見とけ！ これこそが兄妹の間でのみ使用可能な奥義『話題そらしの術』だ！ ……またネーミングセンスの無さが出てきたな……。

「ああ、いや……。……そんなことよりアスナ、元気だったか？ 風邪とか引いてないか？」

「え！？ う、うん……」

よし、アスナの勢いが落ちてきたぞ……。これはチャンスだ。

「それよりお兄ちゃん、質問に」

「そうか、よかったよかった。2週間とはいえ俺はアスナの事が心配で心配で夜も眠れなかったんだぞ。元気なのはいいことだが、あまり俺を心配させるようなことはやめてくれよ？」

アスナの言葉を遮ってアスナの事を抱きしめながら話す。この奥義のポイントは相手のペースに乗らないことだな。

ちなみに、アスナは時々こうやって俺に抱きしめられなければ、明日を生きる希望を失うらしい（昔のアスナ談）。これはまだ治っていない。他人からしてみれば異常だが、兄の俺本人としてはうれしいことこの上ない。しかしそんなアスナもいつかは俺から離れていく（※もともと玲のものではありません）のだと思うと、悲しすぎて涙が出る。そのときにはこの癖も治ってることだろう。一生治ら

なければいいのにか思っていたりする。

「う、うん……」

抱きしめたことに対して、アスナは最初は驚いていたが、だんだんと体の力を抜いていった。ふう、やっと落ち着いてくれたかな？

ネギ君がこの様子を見て呆然としているが、気にしない。今は兄妹のスキンシップの方が先だ。

「じゃなくて！」

いきなりアスナは俺を振り払いネギ君に掴みかかる。なん……だ……と……。アスナが俺から離れていく……。？（※何度も言いますが、もともと玲のものではありません）

いや！ それだけは阻止しなければ！ いつかは来ると分かっているが、俺たちはまだ中学生。まだまだ先になるはずだ！

「あんた、やっぱり超能力者だったのね！？」

「い、いや、ちがつ。そのっ、僕はっ」

むむ、まずいな。アスナとネギ君の会話を聞いていると、ネギ君の口から真実が漏れだそうとしている。それだけは避けなければ。

アスナは昔、その持つ能力がゆえに『黄昏の姫巫女』と呼ばれていた。人々はアスナの能力を欲し、アスナを道具としてしか見ず、利用していた。その時そんな地獄のような状況から助け出してくれたのが、ネギ君の父親の千の呪文の男ナギ・スプリングフィールドが所属する紅き翼^{アラルプ}だった。

その後のもろもろの事は割愛するが、いろいろな出来事があったため、周りの人やそして何より俺の願いで記憶を封印して普通女の子として生活している訳だ。

そのため、今ここでアスナが魔法について知ることは、またあの地獄のような世界に引きずり込むことを意味する。俺は二度とアスナにあんな目には遭わせたくない。だからなんとしてもここであればるのは回避したい。実際に魔法が使われる瞬間を見てしまったので隠し通せるかどうかは絶望的なのだが。俺は何とかネギ君をフォローしようとする。

「まあまあアスナ、落ち着けて。ネギ君だってさっきの宮崎さんを助けるために魔法を使っただしさ」

「あっ玲さん……」

「……………魔法？」

「……………あ……………」

失敗した。

はあ……………。

思わず俺が口を滑らせた後、絶望に打ちひしがれている俺に代わってネギ君がアスナに魔法の事や、立派な魔法使いのこと、そしてナギの事を懇切丁寧に、しかし重要な部分はぼかしながら説明していた。そしてその後、2人は教室に帰って行った。

説明しているネギ君を見ているとなんだかナギの子供だとは思えなかった。なんというか真面目すぎる。あの適当な奴の血を引いているとは思えない。何があったんだ。突然変異か。

はあ~~~~~。こんなにも早くばれるとは……。しかも俺のミス……。アスナにはこのまま普通に暮らしてほしかったんだけどな……。まあ、魔帆良にいる時点で一生隠し通すのは無理か……。あのじじい、わかって魔帆良にアスナを入れやがったな……。何か起こったときに時に対応しやすいからなんでもっともらしい理由付けやがって。ま、何があっても俺がアスナを守るんだだけ。俺がアスナを守らなくて誰がアスナを守るんだ。

考え事をしているといつの間にか俺が住んでいる学生寮の前に着いていた。俺の寮は2人1組で暮らすようになっていて。魔帆良全体が自由な校風なので組み分けは自由。それでも余る人がいないっていうのはすごいよな。俺のルームメイトといえば……

“ガチャ”

「ただいまー。……っていないのか？」

俺が部屋に入ると部屋の中は真っ暗だった。：あれ？ おかしいなあ……。いつもならこの時間は部屋にいるはずなんだけどなあ……。

「ふっふっふ……」

「おわっ！ ……電気もつけなくて何してんだ？ お前」

その人物は暗闇の中で立っていた。その人物とは……

「……さあ何故おまえがこのかちゃんがいるところに行つたのか教えてもらおうか！」

近衛俊司という名のバカだった。余談だが、この部屋にいる俺と俊司は周囲からシスコンと言われている。周りも悪意がないし、俺たちも気にしてないからいいのだが、ここは『魔帆良学園男子中等部最後の砦《変態の巣窟》』と呼ばれている。（女子部への執着という点で）

それよりも今は目の前にいるバカを処理しなければならない。というかいつの間に阿修羅から戻ったんだ？

「いや、ちょっと待て。俺はタカミチに呼ばれただけで……」

「いーや、言わなくていいぞ。先にお前の体に聞いてからにするから」

「お前、それは聞く気がないっていうんじや……」

「ふっふっふ…」

「いや、ちょっと待て、こっちに来るな。その日本刀でどうする気だ、おい。まさか切ろうとか考えて無いよな？　なあ、俺たちって親友だよな？　ちよつ、だから満面の笑みで近づいてくるな。え？

マジで？
ほんとにその刀で……」

「ふふふふふふ」

「ぎ、ぎゃあああああああああああ……！！！！！！！！！！」

その日は1晩中叫び声が途絶えることは無かったという。

明日菜視点

ネギの歓迎会を終え、その日にやることは全て終わらせて、今はパジャマに着替えて布団にくるまっている。残念なことにネギが同じ部屋に泊まることになってしまったが、お世話になってる学園長の頼みがあれば断れない。うん、しょうがない。……納得できないけど。

というか本当に魔法使いなんているんだなあ……。マジ……。なんとかを目指してるらしいけど、こっちにとってはいい迷惑だ。あのガキのせいでせっかく高畑先生が担任だったのに変わっちゃうし……。あーもう！ だからガキは嫌いなものよ！

……でも今日お兄ちゃんに会えたからいいかな……。お兄ちゃんが魔法使いだったらかっこいいのになあ……。……ないか。あんな適当な人が魔法を使ったら世界が何回滅びても足りないから。でも久しぶりに抱きしめられちゃったなあ……。すごい暖かったなあ……。お兄ちゃんがずっとそばにいてくれたらなあ……。……。でも、お兄ちゃんの都合もあるし無理だよな。……。……ん？ お兄ちゃんがシスコンって言われてるってことは、私はブラコンになるのかな？ いいよね、家族を大切にしてるってことだし。

でもなんで今あそこにいたんだろう？ 魔法についてもなんか知ってるみたいだったし……。これはしっかりと問い詰めないと。……。嫌われない程度に。お兄ちゃんに嫌われたら嫌だな……。

あーあ、お兄ちゃんにもう一回だきしめてほしいな……。……。

そうして少女は悶々とした思いを抱えたまま眠りについた。

翌朝、自分のベッドに子供先生が侵入してきていて、絶叫したのは言うまでもない。

第2話 ピンチ! そして、墓穴を掘った俺(後書き)

玲 「よかったじゃん。今日はまともにしゃべってたぞ」

俊司 「まあな」

玲 「次回はお前が大活躍するらしいぞ」

俊司 「本当か!？」

玲 「ああ」

俊司 「よし!じゃあ次回、おれの活躍にこうご期待!」

《今日の特異点》

アスナのキャラ崩壊の一端が……!?

第3話 無性に腹が立つときってあるよね(前書き)

タイトルと内容はほぼリンクしません

では、お楽しみください

第3話 無性に腹が立つときってあるよね

期末テスト。

その学期の総復習の為のテスト。その時期が年度の終わりと重なり、学年末テストとも呼ばれる人類最大の壁。先生によってはその学年の範囲全てを出すという鬼畜の所業出させる禁断の物質。勉強をしなければ容赦なく弱者を切り捨てる悪魔。

俺も本来ならば切り捨てられたくないがためにある程度は勉強しなければならぬのだが、今はそれどころではない。そんなことが些細なことに感じられるほどの出来事が起こったのだ。

普段、このようなことが起こった時は俺一人で解決に乗り出すのだが、今回はルームメートの近衛俊司も問題解決へと動いている。彼にとっても重要な問題らしい。

「「こら、ジジイ!!」」

「ふお!? な、なんじゃ!?」

悪の根源がいる学園長室へと着いた俺と俊司は力に任せてドアを蹴破った。普通に開くはずのドアが倒れるように開いたが、この際どうでもいい。

もちろん、学園長室と言うからにはそこにいるのは魔帆良学園学園長、近衛^{このえ}近右衛門^{このえもん}。俊司の祖父でもある。

俺と俊司は2人でジジイへと詰め寄り、高そうな机に足を乗せて問

い詰める。

「おい、ジジイ。どういことだ」

「な、なにがじゃ？」

「「とぼけんのもいいかげんにしろ。残り少ない髪の毛引き抜くぞ」
」

「だ、だから何がじゃって」

たぶん今のおれは目線だけで人を殺せることだろう。

「「なんで俺のアスナ（このか）がちびっこ先生と同じ部屋なんだよ！！」」（何度も申し上げますが、妹は兄のものではありません）

俺の妹である神楽坂明日菜と、俊司の妹である近衛木乃香は、魔帆良学園中等部女子寮で同室である。兄妹そろって同室というのは些か誰かの作意を感じるのだが、そこはいいだろう。

しかし！　ここで問題が発生した。逆説の接統詞ということはここからが重要だ、よく聞け。先日この学園に赴任してきた弱冠10歳にして先生をやっている子供先生、ネギ・スプリングフィールドをこのジジイがアスナと同じ部屋にしがったんだ！　なんて羨まし……じゃなくて！　おかしいだろ！　先生と生徒が同じ部屋なんて！　しかも年頃の男女！

「ちょっと気にしすぎじゃないかのう……」

「そこが甘いんだよくそジジイ。最近の男女っていうのは関係が進むのが早いんだぞ？　10歳とはいえ分かんねえだろ。そう思うよな、俊司？」

「でもネギ君は真面目な子じゃし……」

「何寝言言ってた、くそジジイ。あのナギの子だぞ？　天然ジゴ

口の性質をもった遊び人の子だぞ？ 分かってるよな？ ああ、と
っても同感だ、玲」

「ううむ、じゃがしかし……」

「「あ？ なんだって？」」

まだ反論しそうだったので、俺と俊司はそれぞれのアーティファクトを出して、ジジイの首元に突き付ける。

俺のアーティファクトは妖刀『四季神^{しきがみ}』。ナギとの仮契約の証だ。その名の通り、四季を操る能力を持ち、天候を支配して自然現象を再現できる。さらに斬撃には完全魔法無効化能力が宿っている。

対して俊司のアーティファクトは妖刀『全神^{ぜんしん}』。全ての神の力を操ることができる刀。俊司の父、サムライマスターと呼ばれた近衛詠春との仮契約の証である。こちらと同じく斬撃には完全魔法無効化能力がある。

「わ、分かった。ネギ君の部屋を変えればいいんじゃない？」

「いや、それはいい。さすがにここに来たばかりで部屋をたらいまわしにされるのはかわいそうだからな。その代わり、アスナとこのかちゃんの部屋を変えろ」

「い、いやでも部屋に空きは無いし……」

「大丈夫だ。この近衛俊司様に任せとけ」

「ん？ 俊司どうするんだ？」

アスナとこのかちゃんの部屋を変えることが（一方的な）交渉の結果決まったが、さすがに俺も部屋までは考えて無い。俊司はどうする気だ？

「たしかネギ君のクラスに2人、寮じゃないところで暮らしてるや

つがいたよな？」

いたっけか？ そんなの。……………。

……………（思考中）……………。

……………あ！ キティちゃ…じゃなくて、エヴァンジェリンか。そういえばいたな、そんな奴。

学園ちよ……ジジイも気が付いたようで、止めようとする。

「なっ、あやつは危険じゃ！ そんなもの断じて認められん！」

「あ？ どう危険だってんだ？」

「あやつは吸血鬼の真祖じゃぞ！」
ハイ・デイトライトウォーカー

「んなこた関係無いだろ。キティちゃんはおとなしくてかわいらしい幼女だぞ？ それに魔法使いを部屋に放り込んだのは誰だっけ？」

「じゃがしかし……！」

「はい、異論は認めませうん」

決まったようだ。それよりも俺は気になることがある。

「俊司…お前……」

「お？ 何だ玲。俺の素晴らしさに声も出ないか？」

「お前……ロリコンだったのか……」

「…なっ…！ 俺がいつそんなこと言った！」

「だってさっきおとなしくてかわいらしい幼女だって……」

あの発言を聞く限り、今日の前にいる男はロリコンにしか見えない。

「あれは言葉の綾だ！ 今も俺はこのか一筋だ！」

それを堂々というのもどうかと思うぞ。

「そういうことはあまり大声で言わない方がいいよ、俊司君」

俺が言おうとしてたことばをとられた……！

俺の言葉をとった奴の方を見ると、いつの間にかいたタカミチだった。

「ふおっ、タカミチ君。して、準備は整ったのかの？」

「はい、学園長」

「なにになに？ 何の準備？」

俊司が質問する。俺にもさっぱりだ。

「はい、玲君。これを読んでごらん」

タカミチは俺に一枚の紙を手渡した。俺が読もうとすると、俊司が横から引っ手繰っていった。おいおい、俺に先に読ませろよ。

俊司は俺のそんな思いを無視して、声を出して読み上げ始める。

「なにになに……。本日付で神楽坂玲を魔帆良学園女子中等部2年A組の副担任として任命するう！？」

「……………は？」

俊司の口から読み上げられた内容は俺の創造の斜め上に行くものだった。大体なんで俺が教師をやんなけりゃいかなのだ。しかも2年A組って言ったらネギ君のクラスだよな？

「おいおい、タカミチ。なんで俺が教」

「タあカあミいチい！ な・ん・で！ 玲がこのかちちゃんのクラスの副担任なんだよお！」

師をやらなきゃいけないんだ、と言おうとしたところに俊司が俺の言葉にかぶせてきやがった。俺に発言権をくれ。タカミチは俊司を無視して話を進める。

「玲君、この間ネギ君をサポートしてくれるって言ったよね？ それで同じクラスにいた方がいいと思ったんだ」

「ちよっと待って。俺、人に教えられるほど頭良く無いぞ？」

「君、数学がすごいじゃないか」

自慢じゃないが、俺は数学で、数学オリンピック…だったかな？ に出て優勝して事がある。数学に関しては自信がある。それ以外は壊滅的だが。

「それに大体、俺も学校あるし」

「そこは、学園長の権限で出席扱いになるようにしてもらった」

俺はジジイをにらむ。ジジイはさつと俺から目線を外した。まったく、余計なことしやがって。

「俺の寮からここって遠いし…」

「ここの寮を使えばいいじゃないか」

「さつき部屋が空いてないって…」

「君はそれ以外に行くあてがあるんだろう？ そこでいいじゃないか」

くっ……。おれのカードは尽きた……。タカミチ、意外に強敵だぜ……。

「ちっ…分かったよ。やるよ」

「そう。じゃあ、よろしく頼むよ」

はあ、厄介なことになったな……。まあいいや、今日はこのままキティちゃんの家に行って寝よう。

この場にいる全員が納得したかと思われたが、一人の近衛俊司は違った。

「な、なんで玲だけ！？ 俺は！？ 俺の青春はどうなるんだあああああああ！！！」

訳のわからないことを叫び始めた。

はつきり言って、やかましい。普段なら放っておくところだが、さつきジジイ相手に交渉してくれたしな……。

「……なあ、タカミチ。こいつもどうにかならないか？」

「彼も、ということかい？ それは難しいな」

「そこをどうにか！」

俺はタカミチに頭を下げる。親友の為なら安いもんだ。

「うーん…1クラスに2人の副担任か……。……いいよ。特例だけで、認めよう」

「ほんとか！？」

その言葉を聞いた瞬間俊司が復活しやがった。復活したのはいいことなんだが、いかんせんうるさすぎる。

こいつのテンションが下がるのには1時間以上の時間を要した。

さて、時は移ってお昼時。

あの後、なんとか俊司のテンションを下げて、学園長室から出て行った。

今は、キティちゃんに家に向かっている。

「よおし、これで俺のバラ色の青春が……」

「分かったからな、落ち着け」

今さらだが、俊司は顔だけ見ればもてる。スツと整った顔立ちは、どんな女子であろうと、1度見ただけで興味を持たせてしまうほどだ。だがしかし、俊司には彼女というものがいた経験が無い。それはひとえに彼の性格が起因しているだろう。

今までの会話から分かるように、俊司は重度のシスコンだ。俊司と会話しようと思えば、まず第一に、妹のこのかちゃんの事。第二にも、このかちゃんの事。ずーっといって、第八十九位に相手が振ってきた話題について話すのだ。話されている方としてはたまったも

のではない。俊司に興味があつて話そうとしているのに、聞かされるのは妹の事ばかり。いくらなんでも引くだろう。こんな感じで俊司の周りからは女の子が離れていくのだ。

多分、今回もしばらくの間は俊司の人気は収まらないだろう。そのうち俊司の本性を知って離れていくだろうが

おっと、考え事をしているといつのまにかキティちゃんの家の前に着いていた。

そこは、森の中に建っているログハウス。まるで、童話にでも出てきそうな感じだ。

「ここで、合ってるんだよな？」

「ああ、多分な。：なんでこんなところに住んでるんだろう？」

「15年もの学校生活で寮が飽きたんだろ」

「ふーん……。ま、なんでもいいか」

「そうだな。じゃ、入るか」

俺はドアノブに手をかけた。……………が、

「あれ？」

ドアが開かない。留守なのだろうか？

「あ、今学校の時間じゃん」

「……あ」

今俺たちは女子寮のアスナたちの部屋にいる。

あの後、どうしようかと迷っていると俊司が

「じゃあ、このかたちの部屋行っちゃう？」

と言ったので、それに同意した形だ。大丈夫、俺は悪くない。主犯はあいつだ。

だがしかし、予想通り鍵が開いてなかったので、誰もいなかった管理人室からくすねて……もらってきて、鍵を開けた。

部屋に入ると、思いのほか整理されていた。アスナがいるとすぐに物が溢れかえるはずんだけど……。あ、そうか。このかちゃんがいるからか。アスナに整理整頓ができるはずがない。

眠くなってきたので、俺はアスナのものと思われる二段ベッドの上に体を横たえる。

……あ、横になったら本格的に眠くなってきた。……このまま寝よう。俊司がなんか言ってるけど別にいいや。

俺はそのまま意識を手放した。

第3話 無性に腹が立つときってあるよね（後書き）

作者は数学オリンピックについてはよく知りません。

気になることがある方は、教えてください。

玲 「やつとまともにしゃべれたな」

俊司 「ああ！ しかも女子校の教師だってよ！」

玲 「大丈夫か？ できんのか？」

俊司 「まかせておけって！ 俺の女の子を求める欲は何もかもを可能にするぜ！」

玲 「暴走して警察に捕まらないようにな」

俊司 「……………」

玲 「では次回、『俊司、この世のものとは思えないことになる！』の巻。お楽しみに！」

俊司 「え！？ なにそれ！？」

玲 「また次回」

俊司 「ねえ、聞いている！？ 俺どうなるの！？」

《今日の特異点》

玲と俊司が副担任に

第4話 アスナの部屋での出来事（約1名無情にもけがをします）（前書き）

お久しぶりです

今回はちょっと短めです

いつも短いですが……

第4話 アスナの部屋での出来事（約1名無情にもけがをします）

（明日菜視点）

はあ、やっと終わった……。ここ最近、放課後の疲労度が半端じゃない……。

うちのクラスでは、小テストをやって点数が悪い人には補習、というシステムがある。これはちょっと前までの英語の担当、高畑先生が作った制度だ。

それで、期末試験が近いからか今の英語の担当、ネギ坊主がめっちゃくちや頑張っている。それこそ、補習を受けているこっちが付いていけない位に。

あーあ、高畑先生だったらどんなにきつくても苦痛にならないのになあ。それに、お兄ちゃんでも……。まあ、無理だよな。お兄ちゃんは適當すぎるから教えても結構な確率で理解できない。何とというか、自分の興味無いことにはとことん興味が無い。そこが好きなんだけど。……………はあ。

私は疲れた体を引きずって部屋の前までたどり着いた。

部屋の鍵を開けるためにカバンの中にあるであろう鍵を探す。

……あれ？

鍵がない。あれ？ なくしたのかなあ？

カバンを床において、中身を全部出す。

……………お気に入りのピンクの筆箱。違う。

……………今日授業で使った体操着。違う。

……………コンビニのビニール袋。違う。

……………『8点』と書かれたテストの答案。これを見ると10点満点だと思いたくなるけど、非情なことにこれは100点満点だ。

……………ちよつと頑張ろうかな…。これも違う。

……………傘の骨組のうちの1本。なんでこんなものが入ってるんだろ？ 違う。

……………このかから借りたシャープペンシル。返さないとな…。違う。

……………鍵発見！ あ、でもこれ自転車のだ…。残念。これも違う。

……………今度こそ鍵発見！ あったー、良かったー。

私は周りに広げたものを異次元につながってるであろう魔窟バッグに戻す。整理しないとダメかな…………？

さて、やっと入れるー。

鍵をカギ穴に入れる。私はそこで違和感を覚えた。

……あれ？ 鍵、開いてる……？ このか、帰ってきてるのかな……。でも、私が出てきたときは教室にいたしな……。ネギもテストの準備があるとか言ってまだ学校のはずだし……。

不審に思いながらもドアを開けると、ドアから光が溢れ出てきた。

……電気、点いてる………？

え！？ もしかして不審者！？ 変質者！？ なんでよりにもよってこの部屋なのよー！

……ふっふっふ……。私たちの部屋に入ってくるなんていい度胸じゃない……。そのことを今すぐ後悔させてやるわ……！

私は気づかれないように音を立てずに部屋に入ってしまった。部屋の中で動きがないということは、どこかに潜んでいるのかもしれない。

私が注意深く部屋の中を見渡すと、二段ベッドの下、つまりこのかのベッドに何か人らしきものがいるのを発見した。

侵入しておいて寝るなんていい度胸ね………！

私は変質者を捕まえるために近づいていく。普通の女の子ならここで、逃げ出すとか誰か助けを呼ぶとかするんだろうけど、私はそんな性格はしていない。それでも力に自信があるのだ。…お兄ちゃんが聞いたらすぐに止めそうだけど。

その変質者に近づいていく。だんだんと顔がはっきりしていくにつれ、ある思いが湧いてきた。

……あれ？　この人…どっかでみたことあるような……。

うーんと、えーっと、……そうだ、思い出した！　このかのお兄さんの俊司さん……だった気がする。同い年だから俊司君でいいか。

で、その俊司君がなんでこんなところにいるんだろう……？　まさか本当に侵入したの……？　でもなんで……？　まさか妹の事が好きすぎて………？

もしそうだとしたらちょっと引く、かもしれない。

だって妹が大好きで部屋に侵入。しかも妹のベッドに寝てるって、犯罪者一歩手前じゃん。

でも、お兄ちゃんがそうだったらいいかもしれない。だってそれってお兄ちゃんに愛されてるってことでしょ？　思わず部屋に行ってベッドで寝たくなるほどに。

……そう考えると、このかうらやましいなく。私もお兄ちゃんに愛されたいなく。それで、この部屋に2人つきりになったときに、ベッドに押し倒されちゃったりして……。

～妄想～

「あつ、だめ、お兄ちゃん……。このか帰ってくる……」

「いいじゃないか、アスナ。2人の愛は誰にも邪魔できないさ」

「もう……ばか……。でも……大好き……」

「俺もだ。愛してるよ、アスナ……」

「お兄ちゃん……」

（妄想終了）

なんてなっちゃったりして！

きゃー！ー！　きゃー！ー！　いいの！？　いいの！？　兄妹で愛し合うなんて周りの目が……。

でも、愛の前にはどんな壁も無意味なんだよね！

…はあ。……お兄ちゃんもこの部屋に来てくれないかな……。

私は携帯を開き、時間を確認する。このかが帰ってくるまでまだ時間がある。私は携帯をベッドの中に放り込んだ。

……それより俊司君どうしよう……。

あれから結構時間が経った。

あの後、俊司君をどうしようか考えて、放っておくことにした。このかが帰ってきたら何とかなるでしょ。

私は、どうやったらお兄ちゃんが私を恋愛対象として見てくれるかを考えていた。お兄ちゃんは私の事を妹として見てるからね。（当然です）

結果として、もっと一緒にいる時間を増やさなきゃだめだ、ということが分かった。通っている学校が違うということもあるけど、私とお兄ちゃんは会う機会が少ない。多くても、1週間に1回ぐらい。私を意識させるにはもっと長い時間一緒にいなきゃね。

一通り考えをまとめて終えて、ふと考える。

…今何時だろう？

私は時間を確認するために、さっき二段ベッドの上に放り込んだ携帯を取りに行く。

その時、私は衝撃的な光景を目にした。

（玲視点）

.....。

.....。

.....（爆睡中）.....。

.....。

.....うつ.....ううん.....。↑携帯を投げられた時。

もぞもぞ……。ん？ な……。ん？ だ……。？ ↑ア
スナが布団の中に入ってきた。

……。再度爆睡) ……。

……。 ……。

ゴン！ ↑下から何かが何かにぶつかるような物音。

「ぐはっ！ ってー……。 ……って、このか！？」

「兄様、こんなところで何やってんの？」

「い、いや、待て。これには深い理由が…」

「問答無用や♪」

「ちよっ、待っ、いや……。ぎ、ぎゃあああああああ！！！！！」

……。

「アスナー、そろそろ行かんと…って、玲君もなん？ はあ……。うちの兄様も2人そろって……。それにアスナも寝てるし……。アスナ、幸せそうやな……。 ……このまま放っというてあげよ。…おやすみ、アスナ」

がちや。↑このかが出て行った。

.....。

.....。

.....ちゅっ.....。↑アスナ
が玲のほっぺたにキス。

.....ぎゅっ.....。

↑玲が無意識にアスナを抱きしめた。

.....んっ.....ぎゅっ.....。↑ア

スナが玲を抱き返した。

このまま朝まで兄妹2人は抱き合ったままだったとき。

第4話 アスナの部屋での出来事（約1名無情にもけがをします）（後書き）

玲 「お前、妹の部屋に侵入なんて……」

俊司 「いや、お前もだろ」

玲 「ごめん、悪かった」

俊司 「お、やけに素直だな…」

玲 「親友の俺がお前の心の病に気付けなかったなんて……」

俊司 「なんだよ！ こういうときくらい俺の思う通りの反応をしてくれよ！」

玲 「……………?」

俊司 「首を傾げるな！」

玲 「俊司がわけわからないですが、今回はこの辺で」

俊司 「おい！」

玲 「ではまた〜」

俊司 「毎回俺を無視して終わるのやめろ！」

第5話（1） 身に覚えがないことって怖い（前書き）

珍しく2日続けての投稿です。

まずは、朝起きた玲のお話

第5話(1) 身に覚えがないことって怖い

俺は外からの強い光によって目を覚ました

「ん…朝か…」

俺が感じた光の正体は朝日だった。起きたばかりで十分に潤んでいる目を通して見ると、とても輝いている。

ふと、ここで疑問に思う。

俺はいつも寝る前に、寮に備えつけられているカーテンを閉める。閉めたのならば、朝の太陽の自己主張するような光は俺の目には届かないはず。

じゃあ、この光は何だろう？

俺は光が降りてきている方を見る。すると、カーテンは閉まっていなかった。ああそうか、昨日は閉め忘れたのか。

俺は勝手に納得する。

しかし、ここで別の疑問が浮かび上がる。

……あれ？ これ、…何？

俺は何かを抱きしめて寝ていた。

この年になって何かを抱いて寝ているというのは些か恥ずかしいも

のだが、俺の意識はこの抱いている『何か』に集中していた。

これ、……まさか……！ ……そんなことが……！

……………。

……いや、分かんねえや。

あっさりと思考することをあきらめた俺は、寝起きでようやく自由に動くようになった体を使い、その『何か』の認識作業に入った。

布団をめくる。

俺の目に入ったのは、端正な顔立ち、細い体、そして鮮やかな色の髪。そう、それはまるでアスナみたいな……。

……………ん？ アスナ？

アスナああああああああああ！！！！……？？？？

な、なな、なななんぞっ！ なんでアスナが俺の布団に！？ あれか！ あれなのか！？ 俺はやってしまったのか！？ 兄妹という壁を越えてっ！ だからここにアスナがいるのか！？ だとしたら俺はっ……俺はっ……！！ うわああああああああああ！！！！

今ここに玲の質問に答えられる人はいない。

第5話(1) 身に覚えがないことって怖い(後書き)

5話はは、あと2つ

玲 「ううっ……俺はなんてことを……」

俊司 「……………」

玲 「俺は、どうすればいいんだよお……」

俊司 「……………」

玲 「なあ、俊司。俺はどうすればいいんだろうな……」

俊司 「……………」

玲 「し、俊司？　なあ、俺を見捨てないでくれよ……。お前に見捨てられたら、俺は、俺は！」

俊司 「……………」 ※気絶してます

第5話(2) 明日菜の大胆な行動 勇気の85%を使いました(前書き)

玲を発見した直後

昨日の夜のお話です

第5話(2) 明日菜の大胆な行動 勇気の85%を使いました

〈明日菜視点〉

私が目にしたのは、私のベッドに寝ているお兄ちゃんだった。

見た瞬間、正直驚いたがそれ以上の喜びがあった。だって、お兄ちゃんが私の部屋に来てくれたんだよ？ うれしくない訳ないじゃん。

お兄ちゃんの幸せそうに寝ている顔を見て思う。

お兄ちゃん、かわいいなあ…。

いつもの起きてる時のお兄ちゃんは頼りがいがあったかっこいいって感じだけど、こういう無防備なお兄ちゃんはとってもかわいい。見てると抱きしめたくなくなるくらいに。でも、起こしたらかわいそうだから今はしない。

お兄ちゃんは私にとっての精神安定剤のようなものだ。

お兄ちゃんの一つ一つの行動、言動、態度。そのすべてが私の生きる動力になる。

昔の事はよく覚えて無いけど、ずっとお兄ちゃんがそばにいてくれたっていうのは覚えてる。記憶としてというか、感覚で。

とにかく、お兄ちゃんは私にとってなくてはならない存在。

高畑先生はとってもかっこいいと思うけど、そう思う気持ちはお兄ちゃんの方がずっと上、だと思う。よくわかんないんだよね。

それにしてもお兄ちゃん、幸せそうだなあ…。

……一緒に寝てもいいよね……？

少し悩んだが、寝ることにした。添い寝するだけだから。それ以上の事はしないから。うん、大丈夫。

私は布団の中にもぐりこむ。

……お兄ちゃん、暖かいなあ……。

私はそのまま無意識のままに眠りに落ちていった。

……ん………ん………？

……ああ私、寝ちゃったのか。

まだ働いていない頭をフル回転させて導き出した答えで、自分を納得させる。外は暗いから…今は夜かな？

私が目を開けると、目の前にはお兄ちゃんの顔があった。

えっ……えっ………!?

お、お兄ちゃん!? なな、なんでここに!?

私は寝る前の記憶を、決して容量が大きいとはいえない頭の中から探し出す。

そういえば、お兄ちゃんの寝てる布団の中に入ったんだっけ……。
我ながら、大胆なことしたなあ……。

それにしてもお兄ちゃん、か、顔が近い……。

……今ならキスしてもばれないよね……?

い、いや、そ、そそそ、そんなことしちゃだめよ! 落ち着け、落ち着くのを神楽坂明日菜。

………ふう……。

……ちょっとぐらいなら……ね? ちょっとだけ、ちょっとだけだから!

私はただでさえ近い顔を、さらにお兄ちゃんに近づけていく。

そして私は、お兄ちゃんの………ほっぺたにキスをした。

い、いきなりく、く、口は恥ずかしいよう……。

キスをできた喜びと、自己嫌悪に押しつぶされる、というよく分か

しばらく眠れなかったのは、言うまでもない。

……あ、このかたちと一緒に行くの忘れてた。明日謝らなきや……。

第5話(2) 明日菜の大胆な行動 勇気の85%を使いました(後書き)

第5話はまだ続きます

明日菜「はあ、やっぱりお兄ちゃんかわいいなあ…」

木乃香「あ、アスナ……？」

明日菜「こ、このか！？ え、えっとこれは違うの！ なんとかかわいいものを見たら愛でたくなるというか……」

木乃香「はあ…」

明日菜「と、とにかく！ お兄ちゃんがかawaiiのが悪いの！」

木乃香「(墓穴掘ってる気がするんやけどなあ……)」

《今日の特異点》

明日菜が図書館島の地下に行きませんでした

第5話(3) そうだよなまさか俺が……いやでも、そのまさかが……(前書き

第5話の最後です。

時間はまた朝に戻ります。

第5話(3) そうだよなまさか俺が……いやでも、そのまさかが……

（玲視点）

こ、このままじっとしていても仕方ない……。今日はジジイにも呼ばれてるし……。かつたるいけど無視したら何言われつか分からないし……。ないしな……。

という言い訳を並べてまでも早くこの場所から立ち去りたい……。！

しかも今気付いたけど俺、アスナの事抱きしめてるし！ や、やっぱり俺は……。！

い、いや、今は考えていてもしょうがない……。今はどうにかしてアスナを起こさないようにここから出ることが先決だ。

でも俺、しっかりと抱きしめちゃってるし……。じ、じゃあやっぱり俺は……。！↑三回目の無駄な自己嫌悪

どうしようかと思い、アスナの顔を見る。

……。あれ？ 見間違い？

俺は目をこすってもう一度アスナの事を見る。

うん、見間違いじゃない。

アスナがくりくりとした実にかわいらしい目を見開いて俺の事を
まっすぐに見つめている。

「…んー。おはよう、お兄ちゃん」

な、なんだとおおおお！！！！！！！！！

アスナが起きてしまっているうううううう！！！！！！

くっ……俺はどうすればいいんだ！

……そんなまっすぐに俺を見つめないでくれよお！

こんなお兄ちゃんでごめんなあ……ううっ……。俺は堕ちてしまっ
たよ、アスナあ……………。

「アスナあ……、ごめんよお……」

「……? なに謝ってんの、お兄ちゃん?」

「……」

「ち、ちよつと！どうしたの！？」

.....1時間後.....

「そ、そうだったのか……」

「そうだったの。だからお兄ちゃんは何もしてないって」

なんかもういろいろとパニックっている俺に対してアスナは懇切丁寧

に説明してくれた。何ともいい妹を持ったなあ……。

「だ、大丈夫？ お兄ちゃん」

「あ、ああ。もう大丈夫だ」

そこで重要なことを思い出した。

「そういえばジジイに呼ばれてるんだよな……。…アスナ、すまないけど先に行く」

「……う、うん。じゃあねお兄ちゃん……」

アスナが少し寂しそうだ。あー！ もう！ かわいいな！ こんちくちよう！

「はあ？ ネギ君がいなくなった？」

無事学園長室まで着いた俺は、そんなことを説明された。

「そうなんじゃ。大丈夫だとは思うんじゃが……。ちょっと様子を見てきてくれんかの？」

「なんでそんなかったるいことを。大体、あんたの事なんだからどつかで監視でもしてんだろ？」

「そ、それは……」

「それなら俺たちが行く必要はないだろ」

「だな。じゃ、帰ろうぜ俊司」

面倒くさいことをさっさと放棄して、俊司に帰ろうと促す。

ちなみに俊司の事だが、部屋から出てくるときに何故か気絶していたので持ってきた。ここに来る道の途中で復活したのだが、気絶していた理由については、本人曰く『触れてはいけない領域』らしい。

「…いなくなった生徒の中にこのかもあるんじゃないかな……」

ジジイがぼそつと呟いた。っていうかそんなこと言ったら……

「なに!？」

こうなるに決まってる。

……はあ、面倒だ。

第5話(3) そうだよなまさか俺が……いやでも、そのまさかが……(後書き

やっと終わりました。

玲 「なあ、アスナ。俺本当に何もやってないよな？」

明日菜 「う、うん……」 ↑顔が赤い

玲 「あ、アスナ？」

明日菜 「昨日は……あつかったね……」

玲 「えっ!？」

明日菜 「……………」

玲 「アスナあ! うつむいてないでなんか言ってくれよお!」

明日菜 「(お兄ちゃんが抱きついてきて暑かったんだよね……)」

この小説とかその他もろもろ

【用語辞典】

とくいてん
特異点

本来、物語に参加するはずのなかった者。本作においては、神楽坂玲と近衛俊司がこれに該当する。

特異点が完成済みの物語にどう影響を与えるのかはあまり明らかになっていない。現時点では、一部の人物のキャラ崩壊や周囲の人物の特異点に関する認識の上書きがあげられる。

また、どのようにして特異点が発生したのか、特異点は人間では無ければならなかったのかは不明。特異点を持つ意味、理由なども不明。

特異点が発生していることや、特異点という存在自体を認識している者がいるのかは分かっていない。

しんけんぐん
神剣群

神の名を冠する伝説のアーティファクトの総称。全て剣の形をしている。

一つ一つの威力が絶大で、それ一つで国を一つ滅ぼせると言われている。『日常の全ての物質、事象には神が宿る』という概念から成り立っている。

その中でも、とある4つのアーティファクトは、その威力の強大さから『四天王』と呼ばれている。

『四季神』、『全神』、『〇〇』、『〇〇』の4つ。(〇と表記されているのは現在不明のもの)

【オリキャラ紹介】

かぐらざかれい
神楽坂玲

本作の主人公。神楽坂明日菜の双子の兄である。特異点の性質を持つ。

基本的に自分の身を人生が面白くなる方向に持っていく人物。ちょっとした逆境も本人にとっては人生の中の楽しみになるらしい。また、周りに厳しい一面も持つ。はっきり言って他人には容赦ない。しかし、困った人を見ると放っておけない性格でもあり、結局は助けてしまう。そんな性格なので、結構周りからは慕われている。また、自分が認めた人物にはとことん甘い。その人物が困っているものなら地球の裏からでも駆けつける。特に双子の妹のアスナに対してはそれが顕著に表れている。その過保護すぎる態度から、周囲から『シスコン』と呼ばれているが、本人は『つまりそれって家族を大事にしてるってことだよな』とあまり気にしていない様子。真面目な時とふざけてる時の境目がよく分からない。しかし、アスナの事になると普段からは考えられないような力を発揮する。それがいわゆる『火事場の馬鹿力』なのか、玲本人の隠している力なのかは、不明。

まとめると、ダメ人間。でも、信頼できる。そんな感じ。時々、ナギを主とする『紅き翼』アラルブラと面識があるような発言をするが、詳細は不明。ナギとは仮契約をしており、アーティファクトは『四

季神』。他にも仮契約者がいるのかは不明。

魔法は使えるが、本人はあまり使いたくないようだ。彼の魔法は彼の『眼』に秘密があるらしい。

運動神経においては、ほぼ完璧。勉強の方も、数学オリンピックに出場するなど優秀な成績を収めている。つまり、完璧超人。魔帆良学園女子中等部の2-Aの副担任をやることが決まっている。男子中等部では帰宅部。

近衛俊司

このえしゅんじ

主人公、玲の親友。近衛木乃香の双子の兄。特異点である。

玲と同じく、人生が楽しければ何でもいい。

とにかく全てに対して楽観的で、心配ごととは縁遠い性格。

同時に感情の起伏が激しく、ちょっとしたことで落ち込んだり、盛り上がりがあったりする。それがとにかくうざい。（玲談）

顔が整っており、ムードメーカー的な雰囲気を持ったため、男子中等部に所属しながらも、結構もてる、黙っていれば。しかし何故か女の子が離れていく。

玲と同じく極度の『シスコン』であり、一番家族愛を大切にする人物。故に『シスコン』であることを誇りに思っている。これがもてない原因ではないかと思われる。傍から見るとその思いは一方通行気味。

このかのピンチになると想像以上の力を発揮するため、力を隠している模様。

まとめると、『宝の持ち腐れ』を体現したような人物。

『紅き翼』のメンバーとも面識があるようだが、詳細は不明。彼の父、近衛詠春と仮契約を交わしており、アーティファクトは『全神』。

魔法の腕は天下一品。ナギにも並ぶほど。また魔力に関しては、本人は隠しているが、極東一と言われる魔力保有量を誇る彼の双子の妹、近衛このかにも負けるとも劣らない。

運動神経は魔帆良一とも言われている。しかし、勉強はからっきし。特に英語。魔帆良学園女子中等部の2-Aの副担任をやること（無理矢理）決まっている。男子中等部ではサッカー部所属。

【キャラ崩壊しているキャラ】

かぐらざかあすな
神楽坂明日菜

魔帆良学園女子中等部に通う、玲の双子の妹。

とてつもなく兄の玲の事を慕っている。それこそ周囲が思わずひいてしまうほど。要するにブラコン。

原作同様、タカミチに淡い思いを抱いているが、同様に玲にも、タカミチ以上の思いを抱いているため、本人には苦悩中な様子。常識や倫理が邪魔している様子。でも、アスナの妄想の中でだけその壁が消え去る模様。とにかく玲と一緒にいたい。

定期的に玲と抱きあわないと生きる気力を無くすらしい。

このえこのか
近衛木乃香

魔帆良学園女子中等部に通う、俊司の双子の妹。

アスナ同様、兄の俊司の事をとてつもなく慕っている。と言っても、アス

ナほどではない。

しかし、本人がいると素直になれず、普通に接してしまう。それを部屋に戻って後悔する毎日を過ごしている。

ネギ・スプリングフィールド

魔帆良学園女子中等部の2-Aの担任の10歳の少年。

玲と接しているうちになんか性格が玲に似てくる、予定。

玲を兄のように慕い、後ろをちょこちょこと付いていく弟のようになる、予定。

まだ登場回数が少ないので、どうなるかは作者にも不明。少なくとも、性格は変わる、予定。

全部、予定。

【その他】

四季神しきがみ

玲がナギと仮契約した時に出たアーティファクト。刀の形をしている。。

四季、天候を操る力を持ち、この世のすべての自然現象を再現できる。

また、四季神自体にも意思があり、人の姿になること（擬人化）ができる。

斬撃、刀身には完全魔法無効化能力があり、魔力を込めることによってそれをバリアのように展開できる。

全神^{ぜんしん}

俊司が詠春と仮契約をしたときに出たアーティファクト。刀の形をしている。

神剣群の四天王以外の全ての力を操ることができる。しかし、威力はオリジナルには劣る。

また、全神自体にも意思があり、人の姿になること（擬人化）ができる。

斬撃、刀身には完全魔法無効化能力があり、魔力を込めることによってそれをバリアのように展開できる。

第6話 回想の中の名探偵、玲（前書き）

今回は作者の勝手な解釈のオンパレードです。

何かご意見がありましたらお願いします。

第6話 回想の中の名探偵、玲

という訳で今、図書館島の地下にいる。

何故ここにいるのかは、回想で振り返ることにしよう。

～玲視点(回想)～

「おい、ジジイ！このかが行方不明ってどういうことだよ！」

ジジイが余計な一言を放ったので、俊司に火が付いてしまった。

「わ、わかった。説明するからちよつと落ち着いてくれんかのう…」

「これが落ち着いてられるかあ！もし、このかに何かあったら…」

「じ、じゃからそれを説明しようと………」
「うっせえ！とつとと説明しろ！」

理不尽だな、俊司。

「……で？このかは今どこにいるんだ？」

数分後、俺の説得もあり落ち着いた俊司。

これはジジイの貸しにしておこう。

「それが…図書館島の地下なんじゃ」

「図書館島あ!?! …まさか部活で迷ったんじゃないだろうな」

このかちゃんは『図書館探検部』という部活に入っている。魔帆良の最大の図書館、通称図書館島はとにかく広い。さらに、年齢によって閲覧制限があるので謎が多いのだ。じゃあその謎を解き明かそう! というのが『図書館探検部』なのだ。俺的には、よくわからない。

「確か…テストが近いから『頭の良くなる本』とやらを探しに行ったらしいんじゃないか…」

なんじゃそら。そんな暇あったら勉強せい。

…でもなんか引かかるなあ……。

図書館島の地下……本……それほどの効果を周囲に与えるもの……。

……………あ! ……もしかして。

俺はジジイに尋ねる。

「なあ、ジジイ。その地下に何か魔導書って無かったか？」

「ふお!?! ……な、無かったはずじゃが……」

ジジイの反応が怪しいな…。というかキョドってる。これは何かあるな……。

「なあ、俊司。聞いたことないか？」

「ん？ ……それなら『メルキセデクの書』があったはずだが……」

「な、何を言っておるのじゃ？」

ジジイの反応がますます怪しい。というか凶星か。それよりなんで俊司が知っているのかが不思議。

「確か、昔にジジイが言ってた気がするんだけどなあ……」

何だ、ジジイの自滅か。

にしても『メルキセデクの書』かあ……。本物の魔導書じゃん。

………そうか、わかったぞ。このぬらりひょんに似たジジイの目的が。

「なあ、じじい。お前、これほぼ全部計画通りだろ」

「ふお！？ な、なんのことじゃ？」

まだとぼける気か。

「なあ、何の事を言ってるんだ？ 玲」

俊司が話についてこれていない。ジジイとしてはその方がいいんだろうが、俺は面白い方向に進めたいからな。よし、ここは説明するついでにジジイの企んでいることを暴いてやろうじゃないか。

「よし、俊司。説明してやろう」

名探偵、玲の推理をとくところなんあれ！

「確か、アスナとこのかちゃんのクラス……つまりA組って去年学年最下位だったよな？」

「ああ、聞いたことがある」

「で、この魔帆良は学年ごとのクラス替えがないからその記録は継続中のはずだ」

「だろうな。学年が変わったくらいで急に勉強ができるようになるとは思えないしな」

「その結果を維持しているのは我が愛しの妹、アスナ率いるバカレンジャーなんだが……それは置いて、さすがに2年連続ずつと学年最下位っていうのは学園長としてどうにかしたいのは当然だろうな。あのクラスならなおさら、な」

「……………」

ジジイが冷や汗をかいているのが分かる。ざまあみろ。

「なあ、あのクラスってどういうことだ？」

ああ、そうか。俊司はあのクラスの異常性を知らないのか。

「副担任になったら嫌というほど分かるから待ってけ」

「……………？ わかった」

「話を戻すが、そんなクラスを見たときにお前が先生だったらどうする？」

「成績を上げようとするだろうな。どんな手を使ってでも」

「そうだ、その『どんな手を使ってでも』っていうのが重要なんだ」
「……………」

今度はジジイの顔が青ざめて言ってる。もう言い逃れは出来ないな。

「テストの点数を上げるために、さすがにテストの問題はばら撒きはしないだろうが、用意するだろうな」

「何をだ？」

「最も勉強するのに適した環境を、だ。あそこは世界樹の根が張ってるから魔力に満ちている。勉強の効率は他の場所の比にならないだろうな」

それも、世界樹の魔力だからな。普通の魔力とは比べ物にならないだろ。

「まあ、確かに……。ってそれだけか？ それなら1週間くらい前からぶっ通しで補習とかをやればいいだけなんじゃないのか？ 質を量で補うようにさ」

「これを考え付いたのが昨日とかだったんだろ。だが、もし環境がこれ以上ないくらいに万全だったとしても、たかが2日や3日でテストの点が大幅に上がるとは考えにくい。そこでこのジジイは保険を2つ用意した」

「保険？」

俊司が俺に聞いてくる。

こういう話し方してると、探偵にでもなった気分だ。

「ああ。まず1つは『メルキセデクの手帳』だ。どうせ図書館島の地下にはネギ君が行くんだろうから、修行も兼ねてるんだろ。無事に生徒を連れて帰ること、それに目的のものを持って帰ってくることにこの2つあたりが条件だな。無事に連れて帰ることは絶対条件。そして目的のもの……つまり『メルキセデクの手帳』を持って帰ってくることだが、あれは外には持ち出せないようになってるはずだ。そ

の結界を解いて持ち出せば、万々歳。持ち出せなくても、あの空間で勉強できればよし、だ」

「……………」

ちらっとジジイの方を見るが、何を考えてるのか分からない表情をしている。大方、この後どうするべきかを考えてるんだろう。

「ucci、そこまで考えられているのか……。でもメルキセデクの書を持って帰ってこれなかったら意味が無いんじゃないか？ さつき『たかが2日や3日でテストの点数が上がるとは考えにくい』って言ってただろ」

「そう、そこで2つ目の保険だ」

「これ以上他にやることあるのか？」

「あるんだ、実は。事前に、つまり考え付いた直後に誰かにあそこに生えている植物を、特に花を持ってこさせるんだ」

「それが何になるんだ……？」

まあ、確かに話を聞いただけじゃ繋がってるとは思えないよな。でも、物事は全て繋がってるんだ。

「さすがにバカレンジャーといえどちょっと勉強したら自分たちがどれほどやばいかったのは分かるはずだ。そうなればテストの前日まで徹夜してでも勉強する。すると、テスト中は眠気とかで集中できなくなる」

「まあ、そうだろうな。俺も経験あるし」

俺も、経験がある。

「その様子を外から見たネギ君はそれを癒そうとするはずだ。魔法の秘匿に関する意識が薄いネギ君ならもちろん魔法で。その時に使

う花を無意識に選ばせるために、地下から持ってきた花を学校中に植えるんだ。世界中の魔力を充分に気吸収した花をな」

「……………？　それで？」

「そんな花を使って癒しの魔法を使ってみろ。世界中の魔力が教室という限定された空間にばら撒かれるだろ？」

「…そうか。そうなれば擬似的にはいえ、図書館島の地下の空間が再現される訳だ」

「そゆこと。どうだジジイ。凶星か？」

「……………」

返事がない。ただのジジイのようだ。

「ま、いいや。俺たちはちょっと様子を見てくるわ。なあ、俊司？」

「ん？　ああ」

「それで悪いんだが、先に準備して待っていてくれないか？」

「それはいいけど……何するんだ？」

「まあな。ちよっとこのジジイと個人的なお話がな」

「ふーん……。分かった。なるべく早く来いよ」

「分かってるって」

俊司退室。

「……で？　わしに何の話じゃ？」

「さっきの俺の話、半分正解ってところだろ」

「……………」

さつき俺は本当のことを話していない。言ったら俊司がマジギレし
そうだからな。

「さつき俺は『ネギ君の修行も兼ねている』と言ったが、あれは間
違いだ。今回の事はネギ君の修行がメインだからな」

「……………」

ジジイは何も言わない。いや、言えないの方が正しいか。

「それに、あの地下にアスナを連れていくことも目的の一つだった
んじゃないか？ それも俺の存在なしで」

「……………」

「目的はまあ……あそこにいる『とある人物』への牽制と、ネギ君
の従者集めってとこかな？」

「……………むう…………」

「言っておくがそんなことはさせない。もし、アスナの意思と関係
なくそんなことが起こったらその関係者はこの世から消えることにな
るだろうな。……………どこかの殺人鬼によってな」

「……………」

「ま、そんなわけだ。あまり下手な動きはしない方がいいぞ」

俺は、学園長室を後にした。

〈学園長視点（回想）〉

ううむ……………あそこまで見事に看破されているとは思わなんだ…
…。

これはちょっと過小評価しすぎたかのう……………？

それに殺人鬼とも言っておったし……。まさかとは思うが警戒するに越したことは無いし……。

これはタカミチ君が帰ってきたら今後の事を話し合わんといけな
様じゃの……。

でも結局はタカミチ君も玲君や明日菜くんの味方じゃし……。う……。

…ふう。苦勞の種は尽きんわい……。

第6話 回想の中の名探偵、玲（後書き）

玲 「どうだ！ 俺の名探偵ぶりは！」

俊司 「で、玲。結局どういことなんだ？」

玲 「うっ……………」

俊司 「（考えてないのかよ……………）」

第7話 例外の守りたいものを守る手段（前書き）

どうも作者です。

今回を持ってしばらく休載とさせていただきます。

詳しくは活動報告で。

第7話 例外の守りたいものを守る手段

（回想終了）

そんな訳で今図書館島の地下にいる訳だ。

図書館島に着いた後、ジジイに電話して地下への生き方を聞いた。

何だか、地下につながるエレベーターがあるらしい。………なんで作っただし。

とにかく、そのエレベーターを使って地下まで降りてきた訳なんだ。

きた訳なんだが………。

「わあゝ。下が見えないよゝ。お兄ちゃん」

なぜかここにアスナがいるんだよな。

いや、この言い方は正しく無いな。何故かアスナが付いてきたんだよな。

ここに来る途中に運が悪いことにアスナに会ってしまったんだ。

で、「どこに行くの？」って聞かれたから正直に答えたら、「私も行く！」って言うてついてきてしまった。

さっき「どうにかできないか？」って俊司にアイコンタクトで伝え

たら、「いや、お前バカだろ」って顔された。

なんだ。俺はいつも人生で最善の選択をしているというのに。

その事はもう諦めよう。アスナは一回決めたら曲げないからな。いくら言ってもしょうがない。

「ねえ、お兄ちゃん。この階段すっごい長いよ」

そう。今、俺の目の前にはとてつもないほどの螺旋階段が続いている。どうせエレベーターを作るなら一番下まで作って欲しかった。

「なあ、玲。こんな長い階段降りんのか？」

「それはだるいなあ……。いいや、ショートカットだ」

俺はそう言って、アスナを抱きかかえる。

「お、お兄ちゃん……？」

「アスナ。ちよつとだけ恐いかもしれないけど我慢な」

「え？ 何を……き、きゃあああああああ……！！！！！！」

俺はそのまま螺旋階段の中心に飛びこんだ。

重力に体を預けていく。

「きゃあああああああ……！！！！！！」

アスナはさつきから絶叫しっぱなしだ。

「きゃあああああああ……！！！！！！」

………さすがに心配になってきた。

「お、おいアスナ？ 大丈夫か？」

「きゃあああああああああああ！！！！！！！！」

……駄目だ。聞こえてない。

すると地面が見えてきた。本来ならここで風の魔法をうまく使って衝撃を減らしてから着地するんだが、今はアスナがいる。魔法の事は知っているが、俺がどうのこうのという話は知らない。いや、知ろうとしているが、俺がうまく話をそらして逃げている。

こんな状況で魔法を使うのは得策ではない。

………気付くと、アスナの声が聞こえない。……あれ………？

自分の腕の中にいるアスナを見る。………気絶しちゃっているよ……。

ま、今は好都合かも。俺は無詠唱で風を発生させ、難なく地面に着地する。

目の前からは光が溢れ出てきている。ここはそうとう明るいようだ。あれ？ ここって地下だよな？

俺はアスナを抱きかかえたまま目の前にある滝のカーテンの横を通る。すると、目の中に飽和量を超えた光が入ってきた。

「うっわ……」

思わず、声を出してしまった。この空間の広さに、ではない。この空間の何とも言えない不思議さと異常さに、だ。

この学園中に認識阻害の魔法が掛かっていると、そんなこと関係なくこの空間はよく分からない安心を作り出してくれる。そんな気がした。いや、長い時間いないからわかんないけど。

でも、それこそが異常なのだ。学園の地下にこんな空間が存在していたら、誰だって疑問を抱くだろう。

しかし、この空間はそんな疑問さえも打ち砕くような絶大な安心感を与えてくれている。

絶大な安心の基、絶大な量の世界中の魔力。この空間は世界中に抱えられているようなものだ。今の俺とアスナのように。規模は違うけど、そういうことだろう。

というか、こんなのが地下にあって大丈夫なのだろうか？ 地盤的な問題で。

「ううん……………」

おっと、考え事しているとアスナが目覚めたらしい。

「ん……………？ お、兄ちゃん……………」

「おはよう、アスナ」

俺はアスナに声をかける。しっかりとした眠りの後ではないからか、アスナの意識はすぐに覚醒したらしい。アスナは今の自分の状況を

確認して、すぐに顔が真っ赤になった。

「お、お兄ちゃん！ な、なんでお姫様だっこ…？」

ああ、そういうことか。アスナが真っ赤になった理由がよく分かってなかった俺だが、アスナに言われてやっと理解した。そりゃ、例え兄であっても同年代の異性にお姫様だっこされるといふのは気分がよいくないし、恥ずかしいよな。もし、その2人が恋人同士ならば気分の悪さは無くなるんだろうが。

俺はアスナを地面に降ろす。降ろす時、アスナが一瞬苦いような表情をした。兄としてはちよっと複雑だ。

「お兄ちゃんのバカ……。…で、ここはどこ？」

なんか小声で罵られた気がする。…そ、そこまで嫌だったのか…。今度から俺も行動を改めないといけないかもしれない。

っと、そんなことよりも今はアスナの質問に答えるのが先だ。

「ここは、図書館島の地下だ」

「…ここが？ なんかイメージと違うかも」

その意見には全面的に同意だ。

「俺もそう思うよ、アスナちゃん」

いつの間にか追いついた俊司が俺のセリフを奪っていった。

「おう、俊司。いつの間に来たんだ？」

「今だ、今。…まったく、無茶しやがって」

「あはは、ごめん」

「笑い事じゃねえっつの」

なんやかんやで心配してくれている俊司。やっぱり持つべきものは親友だなあ。

「大体お前は……………ん？」

俊司が続きを話そうとして、止めた。

俺の後ろにある何かにくぎ付けになっているようだ。まあ、妹至上主義のこいつが動きを止めるものといえば……………

「兄様!？」

妹だ。

「こ、このか……………!!」

妹に飛びつこうと、駆け寄っていく俊司。

「な、なんでここに!？」

そんなこのかちゃんの言葉を遮るかのように、半ばタックルのようにこのかちゃんに抱きつく。このかちゃんはその勢いを殺しきれず、倒れてしまう。

その時にこのかちゃんがけがをしないようにさりげなく自分が下になるように回転する俊司はさすがだと思う。

「このかゝ。会いたかったよゝゝ」

「ちょっ、兄様！」

上で嫌がる妹と、下で抱いて離さない兄。傍から見ると思わず警察に連絡したくなる光景だ。

「えいっ！」

「ぐはっ！」

俊司が沈んだ。思いのほかこのかちゃんの一撃は強烈なようだ。

「このかさーん、どうしましたか……って、アスナさん！？ それに玲さんも！」

ネギ君がこちらに気づいて近づいてきた。こんだけ騒いでは気づくか。

「やあ、こんにちはネギ君。こんなところでどうしたのかな？」

「あ、いえ。ちょっと期末テストの補習を……。あの、玲さんは……」

「玲君！ 久しぶりやな」

このかちゃんがいい感じでネギ君の疑問を打ち消してくれた。

「あ、うんそうだね。こうして会うのは1カ月ぶりくらいかな？」

「そうやねえ。元気にしとった？」

「ははっ、まるで大人同士の世間話みたいだね。まあまあげんきかな？」

「それはよかった。玲君に何かあったら心配やから」

「ありがとう、このかちゃん。それよりもこのかちゃんの足元に転

がつてる『元兄』に心配をしてあげたら？」

「あの、……………玲さんはどうしてここに……………」

ネギ君がなんか聞いてきてるけど無視！

「そんなことより、玲君はなんでここにおるん？ アスナまで連れてきて」

な、なん…だ…と…………？ このかちゃんまでもが敵…だと…………。

「そ、それはな…………！」

いつの間にか復活していた俊司が話す。

「このことが全てジジイの」

「そおい！」

「ぶべらっ！」

余計なことを言おうとした俊司を思い切り蹴飛ばす。…ったく、余計なことしやがって…………。

「ん？ ジジイって学園長の事？」

やばいっ！ アスナには話してないんだった。というかそれだけで分かるアスナもアスナだと思う。

「なにになに？ おじいちゃんの何なん？」

やばいな…………けっこうやばい状況だ。正直に話してしまってもいいんだが、それだと俺とあのジジイの関係について聞かれてしまう。

そうだったらアウトだ。どうやってもそれだけは回避しなければ……！！

その時、空間が振動した。例えるなら、地震の震源が空中にある、みたいな。

「な、なんだ！？」

俺はこの空間を見渡す。すると、一部土煙を上げている場所があった。

俺たちが何もできずに様子を見ていると、その中から砲弾のようなものが飛んできた。というか砲弾だ。

なんだなんだ！ またジジイの差し金か！？

その砲弾は俺たちに一直線に飛んでくる。

ここで四季神を出すのはまずい。少なくともアスナに見られるのだけは避けたい。

すると、おれたちに向かって飛んできていた砲弾に、横からどかい手裏剣が当たって爆発した。

……………え？

「皆の者！ 大丈夫でござるか！？」

あまりの出来事に唖然としていた俺は、その声で気を取り戻した。

敵も啞然としているのか、それからさき、何も飛んでこない。

俺は叫ぶ。

「みんな！ あそこの滝の裏にそれはもうとてつもなく長い階段がある！ そこから逃げろ！」

「お兄ちゃんは！？」

「俺はあそこにいるくそったれどもをどうにかしてから行く！」

「え…？ でも！」

「大丈夫だって！ 俺を信じろ、アスナ！」

「う、うん…」

みんなを先に避難させる。

あいつらをぶっ飛ばしたいが、みんながいちゃあできない。なんて
って俺は………だからな。

「拙者も手伝うでござるよ！」

「私も手伝うアルよ〜！」

なんか女の子が2人、俺の横に並んできた。

「せっかくだがその気持ちだけ受け取っておこう。俺の戦いは誰にも
見せられないのでな！」

「し、しかし……」

「こういうとき、女の子は男の子に従っておくもんだぜ？」

「……わかったアル」

「必ず地上に戻ってくるでござるよ！」

そう言って女の子2人は出て行った。よく分かんが女の子からの

声援って言うのは勇気が出るもんだな。

「よお、楽しそうじゃん」

「そう見えるか？」

俊司、2回目の復活。

「ああ、見えるね」

「どの辺が？」

「全体だ。なんたって『久しぶり』だからな」

「……………そうか」

土煙晴れてきた。俺たちの目に入ってきたのは……………

戦車 ああ！？

いつの時代だよ！　　というかどこだよ！

……………まあ、いいや。俺らがあれを操縦してるやつを……………ことには
変わりはないからな。

「おらあ！　おとなしくしないとぶっ殺すぞお！！」

「さて、俊司」

「ああ、玲」

何が起こっても変わらない。俺の領域を侵した奴は殺すだけだ。

なんたって俺は…………

「さて、零崎を始めようか」

「これより、零崎を開始する」

なんたって俺は、殺人鬼だからな。

第7話 例外の守りたいものを守る手段（後書き）

………作者はやってしまった感で打ちひしがれております。

なんでこうなったんでしょう？

玲 「なんか俺たちの秘密が明らかになったな」

俊司 「………らしいな」

玲 「……ん？ どうした？ 俊司」

俊司 「なんかいやな予感がするんだ。会いたくない人が出てきそう
な」

玲 「会いたくない人って………ああ、あの人か。それは無いだろ。
いくらあの人でも」

俊司 「………そう言い切れないよな」

玲 「………ああ。そこが怖いよな」

第8話 前回と次回のつなぎ（前書き）

どうも！ 作者です。

受験が無事（？）に終わりました。

詳しくは活動報告を。

では、第8話です。

第8話 前回と次回のつなぎ

ぜろざきいちぞく
零崎一賊。

『勾宮』におうのみや 『闇口』やみぐち に続き、『殺し名』序列第3位の殺人鬼集団。

一賊と言うからには、彼らが『血』で繋がっていることは疑いようがない。

しかし、『血で繋がる』という概念はこの『零崎』においては、世間一般とはずれているかもしれない。

彼らの繋がりには、よくいうところの遺伝子単位での繋がりではない。

彼らはよく人を殺す。故に『殺人鬼』と呼ばれる。

人を殺すから『殺人鬼』なのか、『殺人鬼』だから人を殺すのかは分からないが、最初から『そうであるかのように』殺す。

そこには一瞬の躊躇も、

そこには一瞬の猶予も、

そこには一瞬の思考もない。

まるで、人を殺すことが呼吸と同じように、意識すべきではないことのように。

『零崎』は人を殺すことになんの意味も見出さない。

なんの悲しみも覚えない。

なんの苦しみも感じない。

なんの愉しみも出てこない。

そこにあるのは『無』だ。

それに至る経過がどうあれ、殺人という行為自体には何も感じない。

それが———零崎一賊。

幼稚園児が空を飛ぶことを夢見るように、

小学生が友達を百人作ることを夢見るように、

中学生が自分の未来に夢見るように、

そこにあるのは、純粹までの『無』。

それを考えるのなら、彼らは純真無垢な子供に近いのだろう。

……『性質』表すのなら『殺人鬼』だが。

そんな零崎一賊に関して、こんな言葉を残した者がいる。

『先天的な者であり、先天的な物ではない』

これはまさに彼らの性質を言い表しているのだろう、と思う。

彼らは人間の三大欲に殺人欲が加わったような人間だ。

それが洗練され、その感情が普通のものとなったのが、零崎一賊。

しかし、これは何もこの世に生を受けた瞬間からではない。

何かの拍子にそれが表に出てきてしまうのだ。

その才能が『開花』するのではない。『表に出てきてしまう』のだ。

彼らの性質ともいえるそれは、確かに生まれたときから備わっている。

しかしそれは『才能』ではなく、『性質』だ。

『性質』は『才能』とは違い、生物の、その自身の与り知らぬ深層意識に存在するものだ。

鳥ならば、羽を使い飛ぶ。

犬ならば、四足歩行をする、のように。

何かの拍子にそれが外に出てきてしまったとしても、卵のからを割ると同じように『性質』外に出てきただけなのだ。

故に零崎は『そうであるかのように』殺す。

故に零崎は『殺人鬼』と呼ばれる。

そんな零崎一賊にも、例外はある。

零崎は家賊として生きている。

そうしないと、互いや、周囲や、自分さえも傷つけてしまうからだ。

その輪から外れた零崎——それこそが例外だ。

例えるのなら、直接の血のつながりはあるが、それが薄い、いところやはどこだろうか。

その例外の一人が、零崎ぜろざきときしき解識。

もう一人が、零崎ぜろざきもりしき守識。

彼らは常に一緒にいて、常に助けあっている。

そんな彼らに敵意を向けたのなら、まず命の保証はできない。

それに事情を知っている者なら、そんなことはしない。

しかし、ここにいます。

「おらあ！ おとなしくしないとぶっ殺すぞお！！」

それを知らない愚か者が。

「さて、俊司」

「ああ、玲」

零崎はそれに、鉄槌を下す。

「さて、零崎を始めようか」

「これより、零崎を開始する」

そこに、一切の、容赦は、ない。

第8話 前回と次回のつなぎ（後書き）

玲 「久しぶりに復活したぜい！」

俊司 「なあ、今回の話って必要なのか？」

玲 「ああ。自己満足らしい」

俊司 「……………」

第9話 変態紳士との運命的な再会（前書き）

どうも、作者です。

ちょっと間が空きすぎましたかね？

反省します。

では、第9話です。

第9話 変態紳士との運命的な再会

俺と俊司のその言葉が合図になったかのように、敵の戦車から二発目の砲弾が飛び出してきた。

俺は、全長2メートルほどの両刃の大剣『生死判定』ライフジャッジを取り出し、その柄を握る。……そんなでかいもんどこから出したんだって？
ちっちゃいことは気にするな。

その剣で前方から飛んできた砲弾をたたき落とす。

戦車の上に乗っている一人（もちろん目だし帽装着）が何か叫んできた。

「お、お前ら！ なんなんだ！」

「あ？ 何がだ？」

「あの砲弾はずっと進み続ける魔法が掛かってたんだぞ！ 何故それを撃ち落とせる！」

あー、そういうことね。ま、敵さんにネタばらしする気はないけど。
実を言うと、この剣にも魔法無効化能力みたいなものがかかっている。

だが、普通のものとはちょっとばかり性質が違うのだ。

例えば、魔法無効化能力がある武器で召喚された者を攻撃すると、有無を言わさずに送り返すことができる。魔法で呼びだされたんだもんな。

しかし、この武器は『魔法という存在そのもの』を消す。

分かりやすく言うと、さっきと同じように召喚された者を攻撃した場合には『魔法によって呼びだされた』という事実が消える。

途中過程がどうあれ、その攻撃された者は『元からこの世に存在していた者』として扱われる。よって、送り返すのではなくて、『殺す』ことができるのだ。『殺す』ことが零崎の真髄だからな。

で、さっきの砲弾も同じ。

ずっと直進を続けるっていう魔法がかかってるんなら、それを打ち消すだけ。

この剣は触れても魔法を消すだけだけど、その辺の砲弾に負けるほど弱くはないから、たたき落とせたっていう訳。

「お、お前ら！　ふざけてんじゃ」

それは一瞬だった。

俺としてはあんな小物の話なんか聞く気なかったんだが、それでも話している人物の身長がいきなり縮んだら驚く。

いや、『縮んだ』んじゃない。『無くなった』のだ。

頭一つ分。

切り口からは赤い人間の体液が噴水のように噴出し続けている。

これは……。この殺し方は……………。

「なっ……………」

「お、おい玲……………」

「ああ。これは……………」

これは、あの人だ。

俺はこの殺し方をする人を一人しか知らない。

頭一つ身長の低くなったさっきまで人だったものがぐらりと傾き、
地面に吸い込まれていく。

ずちゃっ、という音を立てて戦車の上から落ちた人間が立っていた
場所にはまた違う人物が立っていた。

「うん？ ……ああ、玲君と俊司君か。なんでここにいいのかとい
う疑問はこの際抜きにして、久しぶりだね」

そこのいたのは殺人鬼集団零崎一賊が長兄、
『マインドレンデル自殺志願』ぜろざきそうしき零崎双識
だった。

「いやあ、本当に久しぶりだね、二人とも。私はそんなに感情を表
に出さない方だから分からないだろうけど、これでもとても再会を
喜んでいるんだ。ああ、本当にうれしい。なんていい日だろうか！

とはいえ今はそんなことをしている場合ではないのだけどもね」

勝手にまくしたてて、勝手に自己完結した双識兄さん。

いつも通りで安心したというか残念というか。

「あ、兄貴！」

「兄貴！ 大丈夫ですか！？」

声が聞こえた。

声がした方を見ると、戦車の中にまだ人がいたらしくすでに死体と化した一人のもとに駆け寄っていた。俺からしたらその行動が命取りになると思うんだけどな。

その二人が確認するまでもなく死んでいるというのに。

「き、貴様ら！ 兄貴に何をした！」

俺と俊司の方を向いて聞いてくる。

「だってよ、俊司」

「いや、お前に聞いたんだろ？」

「違うだろ。この場で人殺しそうな人相してんのは俊司だけだって」

「はっ。お前も似たようなもんだろ」

「「ごちゃごちゃ言ってるじゃねえ！ とつとと答えろ！」」

敵さんを怒らせてしまったようだ。

「はあ、俺は何もしてないのに……。……なあ俊司？」

「俺に話を振るな。俺も何もしてない」

「嘘つくんじゃないか。ぶっ殺すぞ！」

「すぐに殺すとか言うて弱く見えちゃうぞ？」

「んだところあ！！」

敵さん……えーっと、……名前知らねえや。ま、いっか。敵さんAが懷からショットガンを取り出した。なんつー物騒なもん持ってたんだ。

「勘弁してくれよ。そんなものを持ち出されたらどうしようもないじゃないか」

「なっ……！？」

双識兄さんがどう考えてもそう思っていないような声で言う。

それに驚いた敵さんAがショットガンを持ち、構えたまま双識兄さんの方向を向く。

「お、お前何者だ！　いつからそこにいた！」

「うん？　変なことを聞くね。でも聞かれたからには答えなければね。」

いつもと変わらない口調で言う双識兄さん。

「まず一つ目の質問だけど、今ここでキミに私の名前を言ったところで理解できないと思うし、行った場合は即座に殺さなくてはならなくなる」

零崎の名があまり知られていないのはこのためだ。何かあったらそれにかかわった者全員を殺す。

「それで二つ目の質問だけど、私は最初からここにいた。君たちが気付かなかったただけだ。それに、そこにいる君たちが兄貴と呼んで人を殺したのは私だ。その二人は関与していない。」

「き、貴様……！」

双識兄さんの態度に敵さんAはショットガンの引き金を引こうとする。

それだけはさせるか！！

俺は肩に背負った『生死判定』を構えて、敵さんAとの距離を詰める。

「なっ……！」

敵さんAが驚いている間に、その勢いを殺さないまま『生死判定』を敵さんAの頭から振りおろす。

鮮血が飛び散る。頭からまっすぐ股へと大きな剣が通る。

人がまるで物のように切れる。

切られたものは、左右に分かれるように倒れる。

「ひっ……！」

残ったもう一人がか細い悲鳴を上げる。まあ男のそれだから逆に気持ち悪いんだけど。

「う、うわあ！」

そしたらそいつが……えっと、敵さんBが逃走を図った。

「逃がす、かあっ！」

それを見た俊司がでかい鉄の棒の先に、これまたでかい斧が付いた——俗に言う『ハルバード』を取り出した。

名前は『絶対鉄壁^{ショックゼロ}』。長さは2メートルほど。その他のことは省略。基本的には『生死判定』と同じだと思ってくれて構わない。

俊司はそれを敵さんBに向けて投げた。それは回転しながら飛んでいく。

敵さんBが自分たちの戦車で空けた穴にたどり着く前に、敵さんBの後ろから迫っていた彼にとっては悪魔にも見えるそれが敵さんBの首から上だけを綺麗に刈り取った。うわお。

命を刈り取ったそれは、刃の部分に付いた血を払いながら俊司の手元に戻ってきた。とんでもない技術だな。

ふう、終わった……。

お、双識兄さんが戦車の上から降りてきた。

「やあ、二人とも。元気になっていたかい？」

「ん、まあまあですね。なあ俊司？」

「だな、まあまあ。……で」

俊司が一呼吸置く。

「なんで双識兄さんがここにいるんですか？」

俺が最も聞きたかったことを俊司が代わりに聞いてくれた。

「ああ、少しね。厄介なことが起こったんだ」

それが本当に厄介なんだよ、と溜息をついた。

「人識と伊織ちゃんがこの敷地内に入ってしまったみたいなんだ」

「「……………なんで？」」

「人識の方はいつもの放浪癖みたいなんだけど、伊織ちゃんがそれを追ってこの中に入ってしまったってね。人識だけだったらこんな入るのも厄介な場所までは追わないんだけど、伊織ちゃんもとなると放っておけなくてね」

「はあ……………そうっすか」

なんだそれ。面倒事にもほどがあるぞ。伊織姉さんも放っておけばいいのに……………。あ、そうか。この変態と二人で待つのが嫌だったのか。

「その二人がどこにいるか分かってるんですか？」

俺が質問する。もしそうだったら早いところお帰りいただきたい。

「いや、全く」

ですよー。

「で？　どうするんですか？　ここの教師やら何やらは結構うっとおしいと思いますけど」

俊司の言うとおりで。無いだろうとは思うけど、捕まっていたりしたら余計面倒くさい。

「あの二人なら大丈夫だろう。それに人識の行きそうな場所くらいわかるさ」

さすがだ。長年の追いかけてこの賜物だな。あんま役立たないだろうけど。

「問題なのは伊織姉さんか……」

「そうなんだよねえ……」

人識兄さんの方はすぐ見つかるだろうし、もし捕まっても勝手に逃げるだろう。余程のことが無ければ。

問題なのは伊織姉さん。あの人はよく分からんし自由奔放だからなあ……心配だ。

「二人とも人識か伊織ちゃんを見つけたら教えてくれないかい？

私の携帯のアドレスは知ってるよね？」

「はい」

「俺もです」

「じゃあお願いだよ。私はもう行かなくてはならないから」

そう言って双識兄さんはあの長い螺旋階段を昇っていった。

「……………最悪だ」

「……………同感だ」

俺は俊司の言葉に同意する。

あんな人たちが長い時間ここにいたら人がこの場からいなくなっちゃう。とっとと見つけなければ。

「……………帰るか」

「……………そうだな」

アスナたちの引越し準備もしなきゃいけないしな。

「おい！ どうした！ 何かあったのか！？」

まだ夜も明けきらないころ。

一人の男の声が響いていた。

この男は、この魔帆良学園に侵入した四人組のうちの一人で、外で待機していたのだ。

しかし仲間からの通信が途絶え、パニックに陥っているという訳だ。

そこに一人の少年が通りかかった。

その少年は見るからに中学生くらいで、顔の右半分には本人がお洒

落のつもりで入れたであろう刺青が入っている。

他の部分にもお洒落のつもりであろう結果が見える。それが空回りしていることを本人は気づいていない。

先ほどの男は焦っていた。手段など選ばないまでに。

そんな男の前に一人の少年がいたのだから、それに手を出してどうにかしようと考えるのは犯罪に手を染めるものとしては当然なのかもしれない。

「おらあ！ おとなしくしな——」
「……ん？」

しかし相手が悪かった。

男の目論見は成功しなかった。

男の手が届く前に男は口を利かなくなっていた。

いや、それ以前に五体満足ではなかった。

少年の持つ曲絃系によってバラバラにされていた。

人であったということが認識できないまでに。

「……ん？ あ、悪い。殺しちゃったか」

しかし、当の少年はそのことについて何とも思っていない。

それが当然であるように、殺す。

少年の名は零崎人識ぜろさきひとしきという。

「ふっふっふ……ついに見つけましたよ人識君！」

そこに一人の少女の声が響いた。

彼女は無桐伊織むどういおり。またの名を零崎舞織ぜろさきまいおりという。

年頃の少女らしく全身の服装は整っていて、頭にかぶっているニット帽が特徴である。

「げっ!？ 伊織ちゃん!？ なんでここが」

「伊織ちゃんの人識君への愛を舐めてもらっては困ります! さあ、大人しく捕まってください!」

「誰が捕まるかよ!」

「あっ! 待ってください人識君! 逃がしませんからね!」

走り去る一組の男女。

この一部始終を、桜咲刹那さくらさきせつなという少女と神楽坂明日菜という少女が互いを認知できない距離で見っていたのは余談である。

第9話 変態紳士との運命的な再会（後書き）

なんでこうなったんだろう……？

玲 「……………いるな」

俊司 「……………ああ、いたな」

玲 「……………どうしようか」

俊司 「……………しばらく放置の方向で」

玲 「……………………」

俊司 「……………………」

第10話 身内に後先考えない人がいると大変（前書き）

どうも作者です。

久しぶりの2日連続投稿です。

ご意見・感想お待ちしております。

では、第10話をどうぞ。

第10話 身内に後先考えない人がいると大変

さてさて、そんな訳で今はキティちゃん——もとい、エヴァンジェリンの家にいる。

どんな訳だよ、とと思っている方もいると思うから今から説明しようと思う。

メンバーとしては俺、俊司、アスナ、このかちゃんだ。

そして今回は前回とは違い、家の中にいる。

しかし、この家の家主は不在だ。

俺たちは不法侵入、というやつに人生で初めて——ではないけど挑戦して成功したということだ。

あの後そのままアスナの部屋に向かった俺と俊司は、部屋に誰もいないことをいいことにアスナと木乃香ちゃんの荷物を勝手にまともに勝手に持ち出した。俺はこれが犯罪ではないと信じている。

そして部屋に『荷物は預かった。ここまで来い』という半ば脅迫文のようなものとエヴァンジェリンの家までの地図を置いて出てきた。

今はテスト期間なので早く学校が終わったアスナちゃんとこのかち

やんがここに来た時に、面倒くさいので小細工せずにドアを蹴破って家の中に入った、という経緯である。

「ねえお兄ちゃん、大丈夫なの？」

「兄さま、ここエヴァンジェリンさんの家やろ？」

入ってすぐくつろいだ俺と俊司とは違い、アスナとこのかちゃんは遠慮しているようだ。まあ、そりゃそうだ。クラスメイトの家に勝手に入ってくつろげる奴はなかないない。

「大丈夫だよ、アスナあいつとは知り合いだから」

「……本当？」

「本当本当。ほら、おいで」

「……うん」

とっても不安そうな表情をしているアスナを落ち着かせる。

「……ね？　大丈夫だから。そんな顔しないで。アスナは笑顔が似合ってるよ」

「……ありがと、お兄ちゃん」

アスナがだんだんと笑顔になっていく。うん、ミッション完了！

「うわあ、玲くんアスナの扱いうまいなあ」

「ほら、このかもこっちおいで」

俊司が両手を広げている。

「兄さま？　うちは大丈夫やで？」

やんわりと拒絶されたようだ。

「ほら、遠慮なくていいから」

「そんなことより玲くん。なんでうちとアスナをここに呼び出したん？」

無視した！

「ああ、少しネギ君と同じ部屋だと問題があってね。少し善後策をエヴァンジェリンと話し合うために来たんだ」

「問題？」

このかちちゃんが小首をかしげる。

「ああ。と言っても俺と俊司がネギ君のことが嫌いでどうしても嫌いで部屋を別にしたいという個人的な事情ではないから安心してくれ。逆に俺としてはネギ君のことは好きだし、あの年であんなに素直な子は見たことが無いからね」

「それは分かってるんやけど、なんで荷物まで持ってきたん？」

「話し合いの結果十中八九引っ越しをすることになるからだ。先に移動しといて損はないだろ？」

「うーん………そうやね」

納得してくれたようだ。

ふと後ろを見るとアスナがまだ不安そうな顔をしている。

「アスナ？ どうしたんだ？ 何かあったのか？」

俺が声をかけると、『何でもないよ、お兄ちゃん』と言ってまた俯

いてしまった。

「何でもないことはないだろう？ そんなに不安そうな顔をしてるんだから。何かあったのなら言ってみろん？」

そういうと『うん』と小さな声で言った。

「あのね、昨日図書館島から帰ったでしょ？ あの時私だけ遅れちゃって暗い道の中をひとりで帰ったの」

「それで怖かったのか？」

「ううん。暗い道には慣れてる方だったから。でもね、声が聞こえたの」

「声？」

「うん」

声くらいでアスナが怖がるだろうか？ これはまだ何かあるな。

「男の人の声だった。何か怒鳴ってたんだけど、よく聞き取れなかった」

「それで、どうしたんだ？」

まだだ。まだ何かある。

「何なんだろうって見に行ったの。そしたら一人の男の子がその男の人に近づいて行ってるのが見えた。そしたらいきなりその男の人が――」

そこまで言ってもアスナが黙ってしまった。相当怖かったのだろう。

「大丈夫、アスナ。無理して言わなくてもいいから。俺はここにい

るから安心して」

俺はアスナを抱きしめる。

「アスナちゃん、その男の人、もしかしてバラバラにならなかった？」

空気の読めない俊司がかつてに発言しやがった。あとで殺しておこう。

しかし、次にアスナの事から発された言葉は俺の予想の斜め上をいくものだった。

「俊司君。なんで知ってるの？」

「「……………へ？」」

「そのあと、男の人が、ば、ばらばらになったの。突然だった……」

アスナは顔を覆ってしまった。

俺はアスナを抱きしめたままだが、冷や汗だくだくである。

何？ いきなりバラバラになったって？ しかも男の子？ 心当たりがあるんだが。

「……………で、アスナ。そのあとどうなったんだ？」

「他に女の子が来て二人ともどこか行っちゃった……」

「……………」

俺と俊司、二人して絶句。

何やってるんすか。人識兄さん、伊織姉さん。

と、その時。この家のドアが開いた。

「ん？ 誰かいるのか？」

やべえ！ 家主が帰ってきた！

何とかここを切り抜けなければ！

- 1 素直に謝る
- 2 逆に追い返す
- 3 抱きつく ↑

よし、これだ！ 俺はテスト中にはそれほど役に立たない脳をフル回転させて考えた行動をする。

「おい誰——」

ぎゅっ。

「なっ！？ だ、誰だ！ お、おい放せ！」

ふっふっふ、ばたばたと俺の腕の中で暴れてるな。

エヴァンジェリンは今、ナギの魔法と学校の結界で全力が出せないらしいからな。この俺でも捕まえておくことができるのだよ！

「放せって言ってるだろ！」
「ぐふっ！」

な、なんだと……。あの状態から腹に一発入れただと……………？

「……………ったく、誰なんだ……………って貴様、神楽坂玲か!？」

「そうだ……神楽坂玲だ……」

俺が名前を言ったところで胸倉を掴まれた。

「遅い！ 遅いぞ貴様！ どれだけ待たせるつもりなんだ！ 最初は3年たったら貴様が呪いを解きに来るって聞いたから待っていたのに！ もう十五年じゃないか！」

「あばばばばばばばばば」

早口でまくしたてながら俺を揺らすエヴァンジェリン。喋れないっての。

「マスター。放した方がいいかと」

お。誰だか分らんが俺を助けてくれようとしてるみたいだ。

「むっ……………そうだな」

そう言って俺の胸倉から手を離してくれた。……はあ、苦しかった。

「……で？ この神楽坂玲さんに何の用ですか？」

「この呪いを解け！ 早く解け！ 今すぐ解け！ とっとと解け！」

「……………呪い？」

「あのバカ^{ナギ}のかけた呪いだ！ 貴様が解くんだろう!？」

「……何の事っすか？」

「とぼけるな！」

「とぼけてないっての。大体、俺ナギと十年くらい会ってねえもん」
「…………それは本当か？」

「本当本当。俺嘘つかないから」

嘘だけど。

「…………じゃあこれはどうするって言うんだ」

「んー。困ってるなら俊司に聞いてみれば？」

「何々？ 呼んだ？」

俊司登場。

「なっ、近衛俊司！」

「確かに近衛俊司だが…………どうした？」

「貴様、この呪いを解けるのか！？ 解けるなら今すぐ解け！」

「あばばばばばばばばばばばばば」

あ、既視感。
デジャヴ

十分後。

やっとのこと落ち着いたエヴァンジェリン。ちよっどこみ入った話をするために二階にいる。アスナたちは1階だ。

「じゃあこの呪いを解くことはできないのか…………」

「ああ。あのバカは魔力量だけは多かったからな」
ナギ

「この呪いを解くことができる奴がいるとすれば、かけた本人だろう」

「……………そうか……………」

本当は解くことができないことはないんだけどね。それをやると後が面倒くさいっていうか、周りがうるさいって言うかつまるところ俺の気が乗らないって言うか。

「……………で？　貴様らはなんでここにいるんだ？」

「おお、そうだった。少し相談がな」

「相談？　珍しいな神楽坂玲」

「まあな。……そんなことより俺と俊司のことは名前で呼んでもらって構わないからな。その代わり俺たちも好きなように呼ぶけど。いいよな？　俊司」

「別にかまわないが」

「ふんっいいだろう。何が起こったんだ？」

「このかとアスナちゃんのことなんだよ、キティちゃん」

「そうなんだよ、キティちゃん」

「その名前で呼ぶな！　貴様らのことを妹にばらすぞ！」

「そう、それぞれ」

「ん？　どういうことだ？」

怒られないようにうまく話題を変えた俺。結構すごいと思う。自分で言ってて悲しくなるけど。

「アスナに魔法がばれちゃったんだよ」

「……………なに？」

そんなことになった経緯を話した。

「——それは玲の自業自得じゃないか。私にしてやれることは何もないぞ」

「いや、実はあるんだ。これが」

「……まさかここに泊めろとか言わないよな」

「お、分かってんじゃないん」

「どうせそんな事だろうと思ったさ。まあ、別にかまわないが一つ条件がある」

こいつの言う条件って怖そうだなあ。ここで素直に了承する奴はバカだと思う。さすがの俊司でも——

「何でも言ってみろ」

俊司が言った。あ、こいつバカだ。

「この呪いを解け」

「だそうだ玲」

「どう思う俊司」

「別にいいんじゃないか？ ばれなければ」

「そうかそうかさすがに貴様らでもできな——なにい！ できるのか！？」

予想通りの反応をありがとう。

「まあな。できないことはない。今すぐは出来ないけどな」

「いつ出来るんだ！」

「うおっ、食い付きがすさまじいな……。まあ、そんなに遠くはないと思うぞ」

さてさて交渉の結果、アスナとこのかちゃんがここに住むことに決定しました！ いえーい！

ついでに俺らもここに住むことが決定しました！ いえーい！

という訳で皆で一階に集合。

「そういえばこんな時間までどこに行ってたんだ？」

「ちよっとジジイに呼びだされてな」

ジジイがねえ………またなんか企んでんのか？

「侵入者がいたらしい」

侵入者………昨日の奴らか？ それなら全部片付けたけどな………。

「侵入者は昨日の時点で8人。今日の朝にそのうちの4人の死亡が確認されたらしい。あらかた変態だろう」

同感だ。それにしても8人か。あそこにいたのは3人だから、仲間がいたのかな？

「後の4人が厄介だな……」

「なんでだ？」

あんな弱かったんだから残りもすぐ片付くだろうに。

「目撃者が一人いて、その証言によりそいつはあの『零崎曲識』と

断定されたようだ」

.....ん？

んんんんんんんんんんん？？？？？

ま、曲識兄さん？ な、な、なんでここに？ ということは残りの
3人は双識兄さんと人識兄さんと伊織姉さんか？ 人数もぴったり
じゃねえかよおおお！！ あの人たち何してくれちゃってんだよ
おおお！！

「そ、それでどうするって？」

俊司が震えた声で聞く。

「見つけ次第、拘束。無理ならば殺害も許可、だそうだ」

こんちくしょおおおおお！！！！

さすがにあの人たちがこの教師どもに負けるとは思えないから、
死人を大量生産するだけだ。やばい。早く止めよう。

「ふ、ふーん。大変だな、エヴァも」

ちなみに、呼び方はエヴァに決まった。俺としてはキティちゃんが
よかったんだが、頑なに拒否されちゃったよ。残念。

そのエヴァがきよとした顔でこっちを見てる。

「.....どうした？」

俊司が答える。俺はさっきからどうしたらうまくいくかを思考中だ。

「何を言ってるんだ。貴様らも来るんだぞ」

「「はっ？」」

「貴様らも来るんだ。先生になるらしいじゃないか。そしたらこれも仕事のうちだぞ」

なんという。あの人たちに勝てるはずが無いのに。特にあの^{双識兄さん}変態。

「俺たちじゃ力不足だぞ？」

「それでもいないよりはましだからな。今日の夜に行動を開始するらしい。準備しておけよ」

面白そうなことになってきたな。嘘だけど。

第10話 身内に後先考えない人がいると大変（後書き）

しばらくこの騒ぎは続きそうです……。

玲 「やっべえな」

俊司 「ああ、これはまずい」

玲 「兄さんたち、大丈夫かな」

俊司 「いや、大丈夫だろ。それより俺たちが危ないな」

玲 「……………」

俊司 「……………」

第11話 やっべえな、最大のピンチだぜ！（前書き）

どうも作者です。

今、とってもテンションが上がってます。

詳細は活動報告で。

では、第11話です。

第11話 やっべえな、最大のピンチだぜ！

さあ夜です。

ええ、夜になってしまいましたよ。

この俺だって頑張ったんですよ！

ミーティングの前に勘付かれないようにそれとなくジジイを説得しようと思いましたさ！ でも、

「何か問題でもあるのかの？」

の一言で何も返せませんさ！

だって勘付かれたらおしまいでもん！

という訳で今は俊司と二人で行動中。

「はあ。面倒くさいなあ」

「右に同じ」

実は家から出るときにエヴァと行動しそうになるというハプニングがあった訳ですが、広範囲魔法が得意なエヴァさんに、

「お前と一緒にいると巻き込まれるんだもん」

と言ったら解決しましたさ。言葉ってすごいですね。

と、前方に命を狙われている人識兄さん発見。もうちょっと隠れて行動してほしいと俺は思う。言っても無駄だろうけど。

その後ろの方に魔法先生らしき方三名発見。

不意打ちでもするつもりか？

ここで人識兄さんが殺したらさすがに庇えなくなるからな。

「人識兄さん！」

ちょっと呼んでみようかな。

「「「ん？」「」「」

すると、人識兄さんと三人の先生と更に俊司までもが俺の方を振り向いた。何故に？

俊司とアイコンタクトで会議する。

（どういうつもりだよ、玲）

（ここで人識兄さんが殺しでもしてみろ、庇えなくなるだろ）

（ああ、そういうこと）

（理解したか？）

（おーけーおーけー、理解した）

すると、先生の一人が話しかけてきた。

「君、そこにいる奴と知り合いか？」

まさかの質問。

いや、この質問自体は予想してたけど、順番が予想外だ。

俺としては先に人識兄さんが話しかけてくると思ったからな。

「い、いや、その……」

「ん？ どうしたんだ？ 玲じゃん。あ、それに俊司も」

ばっかやろおおおおお！！

この人、俺の完璧なる計画（自称）を一言で崩しやがった。

「どういう関係だ？」

うーん、なんて答えたものか……。

「一応、……弟？」

俊司のバカ野郎が言い放った。やはりこいつは一度殺した方がいい。

「君たちも零崎なのか？」

はあ、ここまできたらどうにでもなれってんだ！

「はあ……。そうだよ、だからなんだよ」

「そうか……なら」

そう言って先生たちは杖を構える。

「あのさ、玲。言っちゃっていいのか？」

お前が原因を作ったんだろうが！

それよりも、

「すいませんが、話し合いで解決するっていう方法は……」

「無いな」

「あ、そうですか……」

駄目だった。

「はあ、人識兄さんは手をださないでくださいね」

「あ？　なんでだ？」

「厄介なことになるからです。さて調律完了。——零崎解識が命じる。『正座しろ』」

「「「なっ！！」」」

俺の言葉と同じように三人が正座をした。

説明が遅れたが、この俺零崎解識の真髄は声——『言葉』だ。

それを使って相手を惑わせるもよし、今みたいなことをするもよし。音に関しては曲識兄さん直伝だからな。精神感応だけけど。

「なんでこんなことをするんだ！！」

正座させたうちの一人がなんか言ってる。

「逆に聞きましょう。なんでこんなことをするんですか？」

「零崎は悪だ！ 悪は滅ぼさなければならぬ！」

どこの正義の味方だお前は。

「まあ、いいです。そんな理由に興味はないですから。必要なのはあなたが『零崎に危害を加えた』という事実のみ。ですけどここでそれをやらせると人識兄さんに返り討ちにあうので、止めさせていただきました」

俺は冷静に、そして冷徹に言い放つ。

「しかし、あなたたちが零崎に接触したのは事実。だから忘れてもらいましょう。『ここであつたことを忘れ、眠りにつけ』」

三人の先生は眠った。明日の朝には何があつたか忘れてるだろう。

「ふう。人識兄さん、久しぶりですね」

「お久しぶりです」

俺と俊司は挨拶する。

「おう。で、早速で悪いんだけどこの出口知らないか？ なんか出らんなくてよ」

あ、閉じ込められてる。

「閉じ込められたんですか……。それよりも、双識兄さんが探してましたよ」

「そうなんだよなあ。伊織ちゃんも俺のこと探してるし……。とっ

とどこから出たいんだけどなあ」

「さっきを見て分かったと思いますが、この学校の人たちも探していますよ」

「らしいな。まあそっちは殺して解^{バラ}して並べて揃えて晒してやるから問題はないんだけどよ」

「やめてください。さらに問題が大きくなりますから。俺と玲で出来る限りフォローはしますけど」

「ああ、そういえばお前らなんでこんなところにいるの？」

「俺たちここの生徒ですよ」

その時、近くの草むらから人が出てきた。

「人識君、探しましたよ。早いところ捕まってください！」

「い、伊織ちゃん！？ くそっ」

「あ、待ってください！ 人識君！」

そして二人は去っていった。うーん、急展開。

「……………行くか」

「おや？ 玲か？」

つと、後ろから声が。確かこの声は…………。

「お久しぶりです。曲識兄さん」

俺の音の師匠、『少女趣味』^{ポルトキープ}曲識兄さんだ。いつものコントラファゴットを背負っている。

「ってあれ？ 俊司は？」

「さっき人識と伊織と一緒に走り去っていったぞ」

走りだしたい年頃なんだろうな。

「ああ。それより、なぜこんなところにいるんだ？」

「それ、こっちの台詞なんすけど……」

よく分からん人だ。この人は。

曲識兄さんは自分の店を持っていて、普段はそこから出ないんだけど……。

「僕はレンが困っていると聞いてね。家族を助けるのは当然だろう？」

ああ、そういうこと。曲識兄さんらしいな。

ちなみに、『レン』とは双識兄さんのことだ。

「それで助けに来たのはいいいんだが、閉じ込められてしまっただね」

あんたもか。本末転倒じゃないか。……これで使い方あってるよな？

「さっき人識兄さんとも話してたんですけど、この学園の先生が兄さんたちのこと狙ってます。でも、くれぐれも殺さないでくださいね。こっちもいろいろと面倒ですから」

「ふむ、悪くない。その家族を助けようとする姿勢——悪くない」

お褒めにあずかり光栄っす。

「だが、それは約束できないな」

ですよー。

「はあ……。まあいいです。出口についてはなんとかしますから」

どうせこの結界張ってるのはジジイだろうし、脅しとけば何とかなるだろ。

「本当か？」

「はい。それと、誰かに見つかったら俺か俊司に連絡してください。何とかしますから」

「分かった、善処しよう」

とまあ、こんな会話をしてる時にも時間は経過してるんだよね。

俺と向かい合った曲識兄さんの後ろ、つまり俺の視線の先。

こちらに向かって歩いてくる影。

数は二つ。

一つはおじさんのようなシルエット。いや、実際はもうちょっと年が下なんだけどね。

もうひとつは少女のシルエット。実際は600歳だった気がする。

それは俺にとって地獄への片道切符以外の何物でもない。

死刑宣告

こちらに向かってきているのはタカミチと、エヴァだった。

話し合いで解決できるかなあ……………？

無理っぽいな……………。

第11話 やっべえな、最大のピンチだぜ！（後書き）

玲 「おいおい、なんやかんやで大集合じゃん」

俊司 「だな」

玲 「そういえば軋識兄さんだけいないな」

俊司 「確か、中学校の修学旅行って3年の時だよな」

玲 「……なにそのフラグ」

俊司 「俺も今言って後悔した」

※このフラグは回収されるか分かりません

第12話 零崎VS学園の前哨戦（前書き）

曲識さんの条件にエヴァは入るんでしょうか？

疑問です。

第12話 零崎VS学園の前哨戦

拝啓、これと呼んでいる誰かへ。

ピンチなう。

こんな感じでツイッター風に現実逃避したくなる今日この頃。

僕はどうすればいいのでしょうか。

「おや？ 玲くんじゃないか」

「くつくつく、見つけたぞ神楽坂玲」

二人の言っていることがまるで正反対でございます、どうしましう。

「零崎曲識とお見受けするけど、合っているかな？」

僕に関しては一言で終わりました。

「ああ、間違いないな。僕は零崎曲識だ」

ここで堂々としている曲識兄さんも凄いと思う。

「それで？ なんでここにいるのかな？ 玲くんは」

おっと、来やがった。しらじらしい聞き方しやがって。ここでは嘘をつくのがいいかな。

「いえ、ちょっと散歩ですよ。夜風に当たりたくてね」
「くっく、隠しだてはよくないぞ玲。つい先ほど報告を受けたからな」

「報告？ ああ、そこで寝てるやつか」

もうすでにネタばれ済みってか。じゃあ聞くなよと思うのは俺だけだろうか？ 今はこれが都合いいのだが。

「もう少し早めに眠らせた方がよかったのかな」

「貴様にしては珍しいミスだな」

「珍しいか？ 俺だって人間だからミスくらいあるさ」

「そうか、では手合わせ願おうか、零崎曲識」

エヴァがいつになく好戦的だな。というかそこで曲識兄さんなんだ。

「僕としては遠慮したいところなんだけどね。殺すな、とついさっき玲に言われたばかりだし、家族との約束を破るのは忍びないしね」
「珍しいな。零崎は殺すことに何もためらいを覚えないと記憶しているが？」

「それよりも家族が大事さ」

何か向こうはもう火花を散らせてるな……。

「それで玲くん、本当なのかい？」

「なにがだ？」

「君は本当に零崎なのかい？」

「もう報告は受けてるんだろ？ 確認するまでもないだろ」

「そうか、残念だ」

タカミチがうつむきながら言う。残念そうに聞こえないな。

「僕は君を倒さなければならない」

「ああ？ 無理無理。ここは退けて」

これで退いてくれればいいんだけど……。

「僕が君に負けると思っているのかい？」

無理でしたー。

「タカミチ、話し合いつていう方法はないのか？」

「僕としてはそうしたいんだけどね。学園長がいつになくやるきで」

そういうお前もうれしそうだぞ、とは口が裂けても言えない。へたれですから。

「そうか、残念だ」

俺は四季神を取り出す。

「僕もだよ」

タカミチはポケットに手を入れる。タカミチの独特な構えだ。

「あ、曲識兄さん。そいつ600歳ですからね」

「……本当か？」

「はい。予想外におばあちゃんですから」

「だれがおばあちゃんだ！」

いや、どう考えても600歳はおばあちゃんだろ。常識的に。

「そんな相手に零崎を始めるのも——悪くない」
「さて、零崎を始めようか」

ここに、一つ。

戦闘が始まる。

……逃げた俊司に何かしら天罰が下ることを願って。

～俊司視点～

「人識くーん！ 待ってくださいーい！」

「いちいち着いてくんなよ！」

今俺は前を走っている人識さんと伊織姉さんを追跡中。

「かawaii女の子にこんなに走らせて何がしたいんですか！」

「自分でかawaiiって言うなよ！」

さっきからこんな調子なんだが……。

「お？ 人識か？」

「げっ、兄貴！」

前方に双識兄さん発見。

これは人識兄さんの負けか？

「うふふ、仲がいいねえ、3人とも。うん、家族仲がいいのはいいことだよ。うふふふふ」

「気味悪い笑い方すんな!」

「おおっと、そんなことより俊司。玲はどこ行っただ?」

人識兄さんの罵声も聞き流す双識兄さん。

「ああ、置いてきました。今頃曲識兄さんと話してると思います」

「曲識? あの音楽家が来ているのか……」

「ん? 何だ? 曲識のにーちゃん来てんのか?」

はい、と俺は返事をする。

「曲識さん、ですか。私はあまり面識が無いですね」

「そういえばお前の義手の礼言ったか?」

伊織姉さんはなんやかんやあって両手の手首から先が無い。俺はよく事情は知らんが。

で、その義手を作る人を紹介したのが曲識兄さんだという訳らしい。

「あ、言ってますね。今すぐ行ってきます!」

「おい! ちょっと待て………行っちゃった」

「女の子はちょっとくらい元気な方がいいもんだよ、人識」

「兄貴が言うに変態っぽく聞こえるから不思議だよな……」

俺はどっちかと言うと双識兄さんの意見に賛成だ。

「そんなことより助けてほしいんだけ———」

「斬岩剣っ!」

「……………」

「うわっ！」

双識兄さんの言葉を遮るようにして何かが降ってきた。

俺たちはとっさに回避。

俺たちがいたところがめくれあがっている。あと数瞬遅れていたらどうなったかは明確だ。

俺は来たれ、と全神を出す。
アデアット

「……………」

「状況は理解した」

「それで、俺たちは何をすればいいんですか？」

俺は疑問を口にする。

だけどまあこの疑問はもはや無意味だったのかもしれない。

「……………」

この言葉に込められた意味をどれだけの人が理解できるだろうか。

少なくとも俺は理解できる。

「………分かりました。これより、零崎を開始します」

家族の為に頑張りますか！

……玲の奴、サボりやがって。

（玲視点）

翌日の朝。

とこんな感じに都合よく時間が過ぎ去ってくれた。

昨夜の戦闘は俺たちの完封勝利。まあ、負ける要素が無かったから当然だろ。いきなり伊織姉さんが乱入してきたのは驚いたけど。

家（エヴァの）に帰るとなんやかんやで質問攻めにあった。

何故隠していたのか、とか。お前実はそんなにすごかったのか、とか。お前はアホか、とか。なんか最後の質問は理不尽だと思う。

そんなかわいそうな俺は今何をしているのかと言うと……

「何故黙っておったんじゃ！」

ジジイからの説教を受けております。

俺ら、何もしていないのになあ……。

「いや、だからそれは悪かったって。大体、言っただってこの学校の正義に取りつかれてる教師どもをあんたじゃ止めらんないだろ？」

「玲の意見に全面的に賛成だ。愉快に楽しく学校生活を謳歌してんに命狙われんのはごめんだからな」

いや、本当にこの学園は馬鹿ばかりだ。

『殺し名』『呪い名』の関係者なら零崎の名を聞いて襲ってくるはずが無いのに。

何故かって？ それは零崎の絶対的なまでの家族愛だ。零崎を殺しても他の零崎からの報復がある。故に零崎は『殺し名』の中でも恐れられているのだ。

それなのにこの学園の教師どもは……。あきれて言葉も出ないな。

「それはそうじゃが……」

ジジイは不満ありげに呟く。

「それでも殺すことはないじゃろうが！」

「俺らはやって無いつつの」

「それにそっちから仕掛けてきたんだから、正当防衛だろ？」

実は昨日何人が死んだらしい。まあ、双識兄さんか人識兄さんあたりだろう。

正当防衛だっていうこっちの主張もちょっとは通るはずだ。あの人たちは偶然この中に入り込んだ善良な(?)市民だっていうのに。

「大体あの人たちがいて被害がこれだけっていう方が奇跡だ」

あの人たちの辞書に容赦という言葉は存在しないからなあ。

「じゃが……！」

「あー、分かった分かった。こっちが悪かったから」

「よし、おしまい！ タカミチ、行こうぜ」

「えっ！？ どこにだい？」

いきなり話を振られて驚いているタカミチ。

「教室にだよ。俺たち今日から副担任だろ？」

「あ、ああ、そうだったね。じゃあ、行こうか」

タカミチとともに学園長室を出る俺と俊司。

さてさて、これから楽しい学園生活の始まりだ！

第12話 零崎VS学園の前哨戦（後書き）

俊司「やっと。やっとだ！」

玲「何がだ？」

俊司「やっと……俺の楽園に行けるんだあああ！！！」

玲（このかちゃんに止められると思うけどな……）

第13話 買はしかけてる最中が一番楽しい。(前書き)

言い訳はあとがきにて

第13話 畏はしかけてる最中が一番楽しい。

教室前。

俺は一世代前の物を目にしている。

「ネギ君……これは何だ？」

「えっと、いつものことなんですけど……」

「これは……ちょっと古いな」

今、俺たちの目の前にあるのは教室のドア。『2-A』と書かれている。ここまでは普通なんだ。ここまでは。

「黒板消しトラップって……」

「まだ生きてたんだな……」

「ははは……」

ネギ君が乾いた笑いを浮かべる。そうだろうそうだろう。俺がネギ君の立場でも同じことしてたと思う。

「それじゃあ僕が呼んだら入ってきてくださいね」

そう言って、ネギ君は教室のドアを開けた。

一步踏み出す前にまず上から落ちてきた黒板消しをキャッチ。教室に入った後も、足元に張られた糸やら上から降ってくる水の入ったバケツやらどっかから飛んできたおもちゃの矢やらを華麗に回避。何あの子、すごい。

それにしても中にまで仕掛けられてたか。油断ならないな。というかこれを毎朝か？ うーん、ネギ君もネギ君で大変だが、仕掛ける方の根性も凄いな。尊敬しちゃうっ。嘘だけど。

「それじゃあ、入ってきてくださーい！」

おっと、呼ばれたか。

俺は教室の中に入る。その俺に続いて俊司も入る。

教室中の視線が集まる。うっわー、俺こういうの苦手なんだけどな。

中央の教卓に向かって歩いていく。そして軽やかにスルー。

「えっ、えっ!？」

ネギ君困惑中。もちろん原因は俺。

「あ、いや、ほら。俊司が先に自己紹介やりたいて聞かなくてさ」

そしてさらりと友人に押しつける。

「え？ 俺から？」

「嫌か？」

「いや、別に」

ふう、と俊司が溜息をつく。

「えー、今日からこのクラスの副担任になった近衛俊司だ、よろしくな」

無難な自己紹介。その様子をこのかちゃんは呆けて見ている。むう、反応が面白くないな。

さあて、次は俺か。

俺は一度スルーした教卓に向かう。そして教室中を見渡す。

うむ。見事な沈黙だ。この雰囲気を開くのがこの俺だ！

俺は教卓を思い切りバンツ、と叩く。

教室中が更に沈黙に包まれた。

その雰囲気の中、俺は高らかに宣言する！

「諸君！ 今日からこのクラスは俺のハーレムとして——ぶへっ！」

「何を言ってるのよ、あんたは！」

残念なことに俺の高貴なる宣言はどこから飛んできた何かによって阻止された。投げたのはこの声からしてアスナだろう。

「つてて……。何をするんだアスナ。俺の自己紹介を邪魔して楽しいか？」

「別に楽しくはない！ 自己紹介なんだからもうちょっとまともなことを言いなさいよ！」

「まともじゃないか。今日からこのクラスに俺のハーレムを——」

「言わなくていい！」

「ああ、そうだ。同じく副担任の神楽坂玲だ。よろしく頼む」

「無視するな！」

「ご覧の通り分かると思うが、俺はそこにいるアスナの兄だ。えー、名字だと被るから名前でもよろしく」

俺は軽く自己紹介をする。無論、この程度で終わるとは思っていないが。

「えーっと、何か質問ある人ー？」

俊司が尋ねる。

「はいはい！ クラスのみんなに変わってこの朝倉和美が質問させてもらいます！」

そう言って出てきたのは一人の少女。げんきだなあ。若いなあ。

なんて年寄りくさいことを言ってみたり。

「じゃあまず……名前と年と誕生日は？」

「神楽坂玲、7月7日生まれの14歳だ」

「近衛俊司、9月26日生まれの同じく14歳だ」

「14歳？　じゃあなんで副担任に？」

当然のような質問が来た。99%嘘の真実を教えるもいいが、ここは純粋な100%の真実を教えよう。いや、違うよ？　本当のこと言ってジジイの居場所を無くそうとか考えてないからね？　いや、マジで。

「なんてゆーか、あれだ。そう！　教育実習！」

「じゃあ、将来は教師になりたいと？」

「いや、別に」

「……………」

朝倉さん……であってよな？ 俺の残念な脳細胞じゃ不安なんだけど……。

ま、いいや。まあ、その朝倉さんと思しき方にすっごい冷たい目で見られた。言葉にするなら、「は？ お前何言ってるの？」みたいな。

弱冠14歳の俺にとって同級生からのこの視線はきつつい。精神ががりがり削られていく。やべえ、今なら死ぬる。

「……………悪い、今のは忘れてくれ。本当はジジイの差し金だ」
「ジジイ？」

「学園長のことだよ」

なんかもういろいろと意気消沈している俺に変わって俊司が補足してくれた。

そうか、普通の子たちは優等生さんだから、間違っても学園長のことをジジイとは呼ばないのか。

……………あれ？ でも、俺たちのクラスじゃあ、皆そう呼んでいた気が……気のせいかな。

そんななか、クラス中苦笑いしている。こんな例がネギ君に続いてだからな。まあ、そうなるだろ。

「じゃあ、次。このクラスの中で気になる人は？」

「妹のアスナと、よく知ってるこのかちゃんかな？　あと……いや、何でもない」

実は、窓側の席にいる幽霊さんが気になったんだけど、名前が分からなかった。昨日、名簿もらったんだけど目を通してなかったからだと思う。いや、通しても覚えられないんだけど。

「俊司君は？」

「同じく妹のこのかと、アスナちゃん」

「じゃあ、最後。何か一言！」

「このクラスを俺のハーレム——」

「それはもういい！」

むう、アスナに止められてしまった。

「えっと、よろしくね」

俺とアスナの掛け合いの最中に俊司がそんなことを言って、質問タイムは終了した。

しまらねー。

さて、どれくらいの月日経ったか。

特に特筆すべきことも……あつたが、語ろうとは思わない。だる

いから。

今は、一年前に見た、再びの桜の季節。

出会いと別れの季節。

このクラスにおいてそれは適用されない。クラス替えとか無いからな。

だがしかし、春が来たということはそれぞれの必ず身に何かしらの変化がある。と、俺は思う。今だけ。

今回訪れた変化とは――

「「三年A組！ ネギ先生！ 玲先生！ 俊司先生！」」

学生時代に必ず経験する、進級。

このクラスの副担任になってからの初めての節目、記念。何か思うところがある。訳ではない。なんて言ったら俺は毎日が記念日だからな！

なんて冗談を言う余裕がある今日この頃。今日は、新学期の初日だ。

ネギ君が出席を取っていると、教室に一人の女性が入ってきた。

えっと、……………誰だっけ？

「おはようございます、しずな先生」

隣にいた俊司が挨拶する。そう、しずな先生だ。言っておくが、決して忘れていた訳じゃない。覚えられなかったんだ。

俺も挨拶をしておく。

「おはようございます、しずな先生」

「おはようございます、玲先生、俊司先生」

にこっ、と俺と俊司に微笑みかけてくるしずな先生。……………言えない。この笑顔の前じゃ言えない。名前忘れてましたなんて。実際は覚えて無かったただけだけど。

そんな、今となってはどうでもいいことは置いといて。

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3－Aのみんなも準備しててくださいね」

「あ、そうでした。ここですか!？」

そういえば朝の職員会議でそんなこと言ってたな。

「で、では皆さん。身体測定ですので……………。えと、あのっ、今すぐ脱いで準備してください!」

その瞬間、教室の空気が一瞬にして変わった。もちろん悪い方向に。

一瞬の静寂後、

「「「ネギ先生のエッチ……………!」」」

教室中が声に包まれた。

その声を背にネギ君は出て行ってしまった。そのあとに続いて俊司も。

しかしまあ、子どもと言うのもいいもんだね。なにを言っても許されるんだから。俺も言ってみたいさ、あんなこと。

だけど、今回はネギ君が最良の状況を作ってくれたからね。俺は教室の後ろにでも言ってみ学してるかね。

と、クラスの女の子の一人に声をかけられた。

えっと、確か……そう！ ゆーなちゃんだ。明石裕奈。よし、覚えてた。ナイス、俺の脳細胞。

「あのさ、玲くん」

「ん？ なにかな？」

「出ていかないの？」

「なんで？」

「えっ……だって……」

と、急にもじもじし始めるゆーなちゃん。あのスポーツ少女が珍しい。

「その、……着替えるから、さ」

ほうほう、そういうことか。うむ、ここはひとつ男というものを教えなければ！

「ゆーなちゃん、これだけは言っておこう」

「なに？」

「女の子が自分から服を脱ぐ、という行為の過程は男にとって最高のものなんだ。もちろん、自分が脱がせるのもいいが、俺は断然前者の方がいいと思っている。なぜなら――」

「やあっ」

「ぐあっ！ あ、アスナ、さすがに目潰しは……」

「さっさと出て行かないからでしょ」

ぐう、もう少しで楽園に入れたというのに！ まさかの目潰しだとい？
！？ これでは見えないじゃないか！

な、なんてことだ……同じ教室の中にいるのに見えないなんて！
苦痛以外の何物ではない！

「自業自得でしょ」

……ひどい、ひどいよアスナ。俺にこんな仕打ちをするなんて！

……はっ！ まさか、これが反抗期と言うやつか！

くっ……いつかは来ると思っていたが、アスナの反抗期がこんなに
凄いなんて！ このままではアスナが不良になってしまうかもしれない！

「あ？ 兄貴？ うざいんだよね。話しかけないでくれない？ あ、
この釘バットの威力試したいからさ。実験台になってよ。いや、と
いうかなれ」

なんて事態になりかねない！

……よし、決めたぞ。俺は必ずアスナを更正させてみせる！ 絶対に！

あ、その前に視界が戻ってきたかもー

ブスっ！

「ぎゃああああああああ！！！！ 二回目ええええええ！！」

まさかアスナに俺の考えが読めると……は……。

今回は痛みが脳に直接伝わったらしく、俺はそのまま気を失った。

我が生涯に、結構悔いあったかも。

………がくり。

第13話 買はしかけてる最中が一番楽しい。(後書き)

ほんとにすいません！

私生活がいろいろと忙しくて投稿できませんでした！

感想を書いていただいた方、返信できなくてすいません！

これからは量を増やしてできるだけ定期的に投稿できるようにしたいと思います！

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2308q/>

例外の例外たる所以

2011年6月17日22時08分発行